



**リファレンスガイド
US100d INIファイル
WTOS 8.0 Build 306**

目次

目次	2
1. はじめに	3
2. 改版履歴	4
3. 旧ファームウェアバージョンからの変更点	5
4. INI ファイルの基本事項	7
4.1 INI ファイルの種類	8
4.2 サーバー上のフォルダ構造と各メカニズム	9
4.3 US100d の起動と設定 INI ファイルの取得	11
4.4 INI ファイルの作成規則と注意事項	12
5. 設定 INI ファイルパラメータ	16
5.1 全般設定	18
5.2 管理者モード	21
5.3 使用許諾契約書	22
5.4 ローカル権限	23
5.5 シャットダウンと再起動	25
5.6 証明書	26
5.7 TSCAL License	27
5.8 デスクトップモード	28
5.9 キーボード	29
5.10 マウス	33
5.11 オーディオ	34
5.12 カメラ	35
5.13 ディスプレイ	36
5.14 TCX と HDX	39
5.15 日付と時刻	40
5.16 ネットワーク	41
5.17 無線 LAN/802.1X	43
5.18 サインオン	45
5.19 認証サーバー	53
5.20 VNC	54
5.21 WDM(Wyse Device Manager)	55
5.22 CCM(Cloud Client Manager)	56
5.23 Thinprint	57
5.24 名前解決	58
5.25 DHCP オプション	59
5.26 サービス	60
5.27 印刷	61
5.28 接続設定全般	63
5.29 接続パラメータ	69
5.30 イベントログ	70
6. 接続パラメータのオプション	71
6.1 ICA 接続のオプションパラメータ	71
6.2 RDP 接続のオプションパラメータ	75
7. 基本的な使用例	79
7.1 ユーザーアカウントを有効にする使用例	80
7.2 キオスク設定での使用例	83
7.3 ブローカーサーバー接続の使用例	85
7.4 IEEE802.1X 認証の使用例	87
8. トラブルシューティング	89

1.はじめに

US100d は、Citrix、Microsoft、VMware などの主要インフラストラクチャーがホスティングするマシンで利用可能なアプリケーション、ファイル、およびネットワークリソースへの超高速アクセスを提供する、高度に最適化されたシンククライアントです。US100d は、新しい Wyse ゼロエンジンを使用し、ウイルスやマルウェアからの保護にローカルのウイルス対策ソフトウェアやファイアウォールを必要としない、セキュアでほぼ管理不要なコアを提供します。

企業ネットワークで利用可能なセッションおよびネットワークサービスには、企業ネットワーク上で、直接イントラネット接続経由で、または Citrix や VMware からのセキュアなゲートウェイを使用して離れた場所からアクセスできます。

US100d の初期化 (INI) ファイルは、グローバルレベルと個人ユーザーレベルの両方でシンククライアントに関する必要な設定情報を記述したプレーンテキストファイルです。INI ファイルは、アプリケーションがユーザーの個人設定や動作環境の情報を保存するときに使用します。

注意：

本書は管理者向けのガイドです。US100d INI ファイルの理解および使用に必要な詳細情報を記載しています。使用可能な各種 INI ファイルやファイル作成規則、INI ファイルを活用するために必要なパラメータの詳細も、作業例とともに説明しています。

2. 改版履歴

改版履歴

改版	改版年月日	改版内容
1.0	2014/8/18	新規作成

3. 旧ファームウェアバージョンからの変更点

項目	詳細
ファームウェアバージョン	WTOS 8.0
ビルドナンバー	306
ファームウェアファイル名	DOVE_boot.jp
ローカライズ	Japanese

※ 旧ファームウェアバージョンを使用されている場合はアップグレードする必要があります。

旧ファームウェア(WTOS 8.0 Build 037)からの変更点

変更点	詳細
Device=Ethernet パラメータに下記オプションパラメータを追加 • StaticIPWaitFileServer	静的 IP アドレスを指定した場合、秒単位でタイムアウトのしきい値を指定します。
Hosts パラメータを追加	Hosts ファイル名を指定します。このファイルはホスト名と IP アドレスを関連付ける単純なテキストファイルです。
OneSignServer パラメータに下記オプションパラメータを追加 • DisableBeep • KioskMode • EnableFUS • TapToLock • EnableWindowAuthentication • AutoAccess • NetBIOSDomainName	OnSignServer パラメータは現時点ではサポートしておりません。使用する場合は、十分に事前検証を行い、問題がないことを確認してください。
ScreenSaver パラメータ値の変更	デフォルトを 10 分に、最大値を 30 分に変更しました。
SecureMatrixServer パラメータを追加	シームレスにブローカーサーバーにログオンするための SecureMatrix サーバーを指定します。
SessionnConfig=RDP パラメータに下記オプションパラメータを追加 • AutoDetectNetwork • TSGWEnable	AutoDetectNetwork は、RDP セッションにおいてデータ転送のネットワーク帯域幅を自動的に設定します。 TSGWEnable は、Microsoft RDS の公開リソースへ接続するために TS(RD)ゲートウェイの使用を有効化します。
ConnectionBroker パラメータに下記オプションパラメータを追加 • EnableVWGateway • VWGateway	vWorkspace ゲートウェイを設定します。

変更点	詳細
Device=vusb パラメータに下記オプションパラメータを追加 <ul style="list-style-type: none"> • InterfaceRedirect 	InterfaceRedirect は、複合デバイスの一方をローカル、一方をリモートセッションで使用するために有効化します。
MultiLogon パラメータを追加	異なるユーザー名、パスワード、ドメインで Citrix Xen サーバーへログオンできます。
PnLiteServer パラメータに下記オプションパラメータを追加 <ul style="list-style-type: none"> • CAGAuthMethod={LDAP+RSA,RSA+LDAP} • SmartcardPassthrough • StoreFront 	CAGAuthMethod={LDAP + RSA、RSA+ LDAP} は CAG 認証を設定します。 SmartcardPassthrough はスマートカードパススルー認証の有効/無効を設定します。 StoreFront 認証をサポートします。値は NVRAM に保存されます。
SignOn パラメータに下記オプションパラメータを追加 <ul style="list-style-type: none"> • SCShowCNName • SCSecurePINEntry 	SCShowCNName はスマートカードサインオンを使用する際にユーザー名と証明書の CN 名の使用を強制します。 SCSecurePINEntry は Cherry キーボードで pkcs15 カード用セキュア PIN 入力機能を有効にします。
Dualhead パラメータに下記オプションパラメータを追加 <ul style="list-style-type: none"> • MonitorAutoDetect • Swap 	MonitorAutoDetect は接続されているモニター数を検出するかどうかを決めます。モニターが1つのみ接続されている場合は、スパンモードはミラーモードとして転送されず Swap はデュアルモニター使用時に Mainscreen=2 が設定してある場合、モニター表示を入れ替えます。

4. INI ファイルの基本事項

この章では、INI ファイルを作成して使用する基本的な方法について説明します。

この章の内容は以下のとおりです。

- INI ファイルの種類
- サーバー上のフォルダ構成と各メカニズム
- US100d の起動と設定 INI ファイルの取得
- INI ファイルの作成規則と推奨事項

4.1 INI ファイルの種類

INI ファイルには以下の種類があります。

- **グローバル設定 INI ファイル(wnos.ini ファイル)**

wnos.ini ファイルには、サーバーにアクセスするすべてのシンクライアントに影響を与える「グローバル」パラメータを記述します。

- **MAC 設定 INI ファイル(\$MAC.ini ファイル)**

\$MAC.ini ファイルは、デバイス固有の設定に使用します。wnos.ini ファイルを見つけると、シンクライアントは wnos.ini ファイルを処理します。Include=\$MAC.ini 文が記述されている場合は、\$MAC.ini ファイルを処理します。

また、wnos.ini ファイルと \$MAC.ini ファイルの両方に設定値が異なる同じパラメータがある場合、優先される設定値は wnos.ini ファイル内の include=\$MAC.ini パラメータの配置により決まります。

(例 1)

parameterA=valueRED

Include=\$MAC.ini(→\$MAC.ini 内に parameterA=valueBLUE を記載)

↓

適用される値は valueBLUE とります。

(例 2)

Include=\$MAC.ini(→\$MAC.ini 内に parameterA=valueBLUE を記載)

parameterA=valueRED

↓

適用される値は valueRED になります。

- **ユーザー設定 INI ファイル({username}.ini ファイル)**

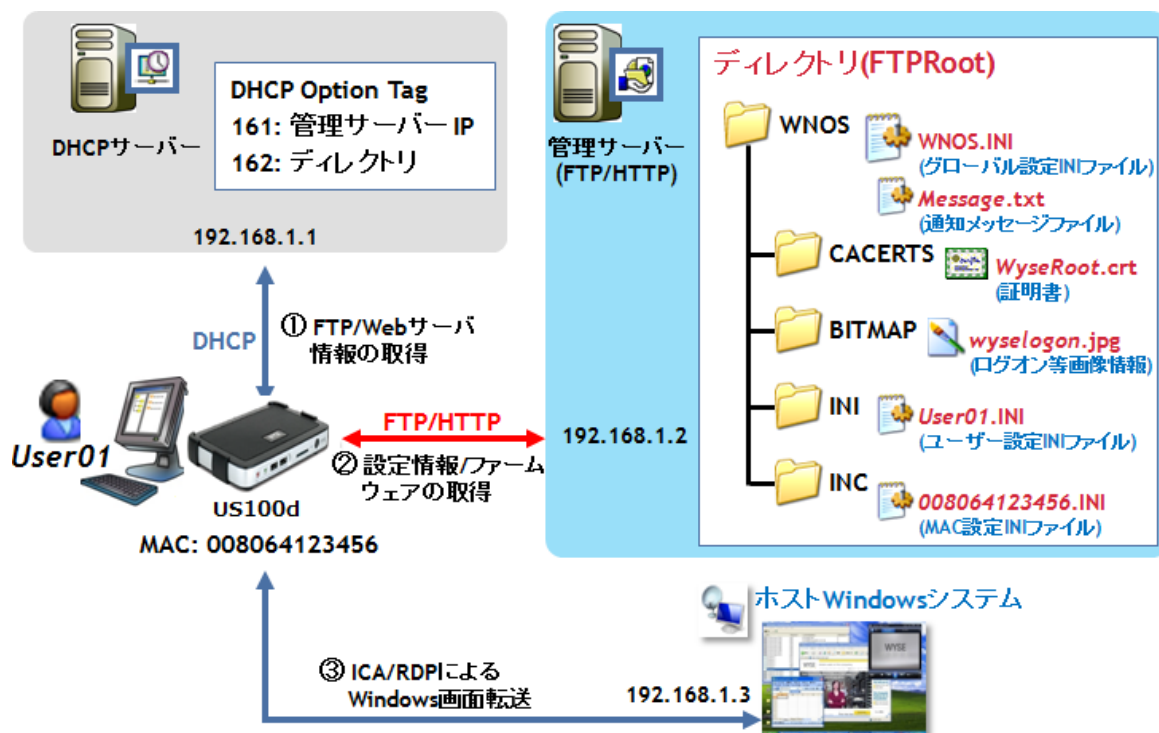
{username}.ini ファイルには、個々のユーザーの接続プロファイルを構成するのに必要なユーザー固有の「ユーザープロファイル」パラメータを記述します。{username}.ini を読み込むタイミングはローカルログオンダイアログで資格認証を行った時です。入力した資格情報のユーザー名と同じ名前のファイルを ini フォルダから読み込みます。

※ wnos.ini に Include 文の記載は必要ありません。

※ {username}.ini ファイル内の「ユーザープロファイル」パラメータは、基本的に wnos.ini ファイル内の同じ名前の「グローバル」パラメータを上書きしますが、上書きできない「グローバル」パラメータもあります。

4.2 サーバー上のフォルダ構造と各メカニズム

説明のためのシステム概要を下記に示します。US100d シンクライアント端末側の重点をおき、ホスト側は、最もシンプルなりモートデスクトップ接続(RDP)による Windows OS への接続設定を通して、ゼロコンフィグレーションによる設定方法を説明します。下表には、ゼロコンフィグレーション環境を実現するためのテスト環境の各システム構成情報を示します。



ファイルサーバー上の構成内容

種類	設定要素	要件	内容
フォルダ	wnos	必須	中央管理を行うための wnos.ini ファイルを格納するフォルダです。詳細なディレクトリ設定は、DHCP オプション(162)タグにより、設定可能です。 ファームウェアおよび、以下のオプションフォルダも格納します。 <ul style="list-style-type: none"> ・ bitmap フォルダ ・ cacerts フォルダ ・ font フォルダ ・ inc フォルダ ・ ini フォルダ ・ locale フォルダ ・ trace フォルダ
ファイル	wnos.ini	必須	ファイルサーバーにアクセスする全ての US100d の設定情報を格納するグローバル設定 INI ファイルです。ファイル名の変更はできません。

フォルダ	bitmap	任意	US100d ローカルデスクトップ上で利用する画像を格納するフォルダです。フォルダ名は変更できません。
フォルダ	cacerts	任意	SSL 通信等に必要な証明書格納フォルダです。フォルダ名は変更できません。
フォルダ	font	任意	フォントファイルが必要な言語のフォントファイルを格納するフォルダです。 HTTP/HTTPS ファイルサーバーを使用する場合は、IIS の MIME の種類に「.fnt」拡張子(application/octet-stream)を登録する必要があります。
フォルダ	ini	任意	各ユーザー設定ファイル(User01.ini 等)を格納するフォルダです。フォルダ名は変更できません。
ファイル	User01.ini	任意	各ユーザー固有の設定 INI ファイルです。ファイル名は US100d のローカルログオンダイアログで入力したユーザー名です。 (例：ローカルログオンダイアログに入力したユーザーID が "User01"の場合、ユーザー設定ファイル名 "User01.ini"を読み込みます。
フォルダ	inc	任意	MAC アドレス別の INI ファイルを格納するフォルダです。フォルダ名は変更できません。
ファイル	00806412345 6.ini	任意	wnos.ini ファイル内で、"Include=\$MAC.ini"を記載すると、US100d の MAC アドレスと同じファイル名の INI ファイルを読み込みます。
フォルダ	locale	任意	ローカルメッセージファイルを保存するフォルダです。 HTTP/HTTPS ファイルサーバーを使用する場合は、IIS の MIME の種類に「.msg」拡張子(application/octet-stream)を登録する必要があります。
フォルダ	trace	任意	キャプチャして再生できるトレースファイルを保存するフォルダ。 (パラメータ "EnableTrace=yes" を有効にする必要があります)
ファイル	DOVE_boot.jp	任意	ファームウェアファイルです。WNOS フォルダ配下に配置します。ファイル名は変更できません。HTTP/HTTPS ファイルサーバーを使用する場合は、IIS の MIME の種類に「.」および「.jp」拡張子(application/octet-stream)を登録する必要があります。
ファイル	Message.ini	任意	WNOS フォルダ配下に配置します。設定 INI ファイルに "NoticeFile=ファイル名"を記載すると読み込みます。ファイル名は任意です。

4.3 US100d の起動と設定 INI ファイルの取得

US100d の起動から設定 INI ファイル取得までを以下に説明します。

1. US100d を起動すると、DHCP サーバーからの IP アドレスとオプションタグ情報を取得します。
※ 注意: DHCP サーバー上にオプションタグが設定されていない場合、クラシックデスクトップモード使用時のみ DHCP サーバーの IP アドレスをデフォルトの FTP サーバーとして登録します。
2. グローバル設定 INI ファイル(wnos.ini)を読み込みます。DHCP サーバーから取得した FTP サーバー情報(IP/ホスト名、FTP ディレクトリ)を元に、FTP サーバー上に配置されているグローバル設定 INI ファイル(wnos.ini)を読み込みます。FTP の接続は、FTP GET コマンドにより、FTP プロトコル(パッシブモード)のルールに従って行われます。
※ アクセスした FTP サーバーやディレクトリ、wnos.ini ファイルが存在しない場合、再度同じ FTP サーバー/ディレクトリへのアクセスを試みます。最終的に情報が存在しない、設定情報のないデフォルトの状態、US100d が起動します。ただし、“EnableCacheIni”などの設定 INI ファイルパラメータにより、US100d ローカルに設定 INI ファイルがキャッシュされている場合は、キャッシュ上の設定で起動することができます。FTP 取得は、US100d の起動時間に影響するため、DNS 解決/ロードバランズ等の仕組みを用いる場合は、注意が必要となります。また、US100d 上に設定されている FTP サーバーや FTP ディレクトリ上に適切なファイルが存在しない場合、該当のファイル等のアクセス確認に時間が要するため、端末自体の起動に時間がかかってしまう可能性があります。
3. 各種設定 INI ファイルを読み込みます。たとえば、wnos.ini ファイルに“Include=\$MAC.ini”記載されると、US100d の MAC アドレスと同じファイル名の INI ファイルが読み込まれます。また、その設定情報に基づいて、US100d ローカルで利用するファイル、証明書、ログオンダイアログタイトル画像、ローカル画面の情報通知などが取得されます。設定 INI ファイルに記述されている設定は、原則上方から下方へ 1 行ずつ読み込まれていきます。同じパラメータが異なる設定 INI ファイルで設定されている場合、最後に読み込まれたものが優先されます。
4. ローカルログオンダイアログ使用時(SignOn=yes およびブローカーサーバー未指定時)には、ユーザー設定 INI ファイルを読み込みます。US100d のローカルで表示されるログオンダイアログに入力されたユーザー名と同じファイル名の INI ファイルを、INI フォルダ配下から読み込みます。たとえば、「User01」というユーザー名が US100d ローカルログオンダイアログでログオンを実行したときに、「User01.ini」ファイルを INI フォルダ内から取得します。
※ ユーザー設定 INI ファイルを読み込むタイミングはローカルログオンダイアログ上で資格認証を行った時です。他の設定 INI ファイルとは読み込むタイミングが異なることに注意してください。

4.4 INI ファイルの作成規則と注意事項

設定 INI ファイルで設定するパラメータは、基本的にメインパラメータとサブパラメータ(オプション)で構成されます。例えば「Connect」というメインパラメータと、「Connect」パラメータ配下にサブパラメータ(オプション)で指定されている構造となります。メインパラメータの終了は、必ず改行を行い、次のメインパラメータを記述します。サブパラメータは、必ずメインパラメータの後に半角スペースを入れて、次のサブパラメータを記述します。継続してサブパラメータを記述する場合、全てサブパラメータ間には、半角スペースが必要となります。サブパラメータが複数存在し、テキストエディタで編集するときに、閲覧しやすくするために、「¥」マークを入れて改行を実行することができます(下図参照)。「¥」マークの挿入により、メインパラメータから続くサブパラメータが一連のコマンドが一連の命令であることを示します。「¥」+「改行」は、その行の継続を示すため、特殊文字「¥」の利用方法に注意が必要となります。また、「¥」マークを入れた場合でも、サブパラメータ間には半角スペースが必要となるため、注意が必要となります。パラメータ、その値の入力値は、大文字小文字を区別しません。「signon=yes」、「SignOn=Yes」、「Singon=yes」は、全て同じ意味のコマンドとして、US100d上で解釈されます。

設定 INI ファイル内にコメント行を入れたい場合、文字列の先頭に、「#」を挿入し、コメントを入力します。「#」から始まる文字列は、設定 INI ファイルのパラメータとしては処理されません。「#」のコメント行の終わりを示すのは、コメント行の最後に、改行を入れます。

※ 「¥」マーク後の改行は、設定 INI ファイル内では改行コードとみなされなくなります。コメント行やその他パラメータ内での「¥」マークの記述は、記述ミスの原因になるため、推奨されません。

WNOS.INI

```
# RDP接続設定
Connect=RDP ¥
Description="Windowsデスクトップ" ¥
Host=192.168.1.1
Colors=true ¥
Autoconnect=1
```

サブパラメータを「¥」改行で区切る記述方法。
注意:「¥」マーク前に半角スペース必要

↑ ↓
同じ意味

WNOS.INI

```
# RDP接続設定
Connect=RDP Description="Windowsデスクトップ" Host=192.168.1.1 Colors=true Autoconnect=1
```

サブパラメータを半角スペースのみで記述し、一行で表示する方法。

必須パラメータ

INI ファイルを使用している場合、必須パラメータは接続パラメータのみです。それ以外のパラメータは記載せずとも、デフォルト値で動作します。

リストの区切り文字

リストの区切り文字にはセミコロン「;」またはカンマ「,」を使用してください。

システム変数の使用

接続パラメータの一部のオプションは、文字列のマッピングにシステム変数を使用することができます。変数はどのように組み合わせることもできます。システム変数の使用をサポートするオプションについては、本書の「第6章(接続パラメータのオプション)」を参照してください。

表1

オプション	値
\$SN	使用されているシリアルナンバー。
\$MAC	使用されている MAC アドレス。
\$IP	使用されている IP アドレス。
\$TN	端末名。
\$PF	プラットフォーム名。
\$UN	使用されているサインオン名。
\$PW	使用されているサインオンパスワード。
\$DN	使用されているサインオンドメイン名。
\$WPUN	使用されている PEAP/MSCHAPv2 ユーザー名 (802.1x によって異なる)。
\$WPPW	使用されている PEAP/MSCHAPv2 パスワード (802.1x によって異なる)。
\$WPDN	使用されている PEAP/MSCHAPv2 ドメイン (802.1x によって異なる)。
&Right(\$xx, i) または &Left(\$xx, i)	変数を左右どちらから読むか指定します。 \$xx には、上記のパラメータのいずれかが入ります。 パラメータ i は、左右のオフセット桁数を指定します。

日本語利用時の注意事項

設定 INI ファイル(wnos.ini)内に、日本語文字列(マルチバイト)を利用する場合は、注意が必要となります。コメント行に日本語文字列を入れる場合は、必ず文字列の最後に、半角スペースを入力します。半角スペースを入れない場合、日本語文字列の一部が改行コードと解釈されて、設定 INI ファイル自体が動作しなくなる場合があります。また、「Description」パラメータの様に、日本語文字列を登録する場合、パラメータ全体が文字列であることを示すために、ダブルコーテーションマーク「"」で囲む必要があります。文字列登録時の注意点は、文字列内に半角スペースが存在した場合、サブパラメータの区切りであるとみなされて、設定 INI ファイル全体が動作しなくなる可能性があります。パラメータに文字列を用いる場合は、「"」マークで囲むことが望まれます。

※ 半角カタカナを使用した場合、「"」マークで文字列を囲んでも US100d 上で文字化けします。半角カタカナは使用しないでください。

WNOS.INI

```
# RDP接続設定
Connect=RDP ¥
Description="Windows デスクトップ" ¥
Host=192.168.1.1
Colors=true ¥
Autoconnect=1
```

日本語コメントの場合、必ず最後に半角スペースを入れます。

文字列を入れる場合、一連の文字列であることを示すため、コーテーション「"」で囲みます。

接続設定パラメータの注意事項

wnos.ini ファイルにおいて、接続設定全般パラメータ (SessionConfig=All、SessionConfig=RDP or ICA 等) は、他の接続パラメータ (ConnectionBroker=、Connect=RDP or ICA 等) より前に記述してください。

空白スペースを含む値を設定する場合の注意事項

空白スペースを含むパラメータとそのオプションの値は、必ず引用符の内側に入れてください。

(例:Description="RDP_ Connection")

ユーザー設定 INI ファイルのアクセス権限の注意事項

ローカルログオンダイアログからパスワードを変更するためには、ユーザー設定 INI ファイルを書き込み可能に設定する必要があります。

※ 本 WTOS バージョンではローカルログオンダイアログからパスワードを変更できない問題があります。

接続項目の上限値の注意事項

INI ファイルに定義した接続項目の合計数が、定義されている合計最大接続数を超えることはできません。最大接続数には 216 というデフォルトの上限がありますが、この値は wnos.ini ファイルで "SignOn="パラメータのオプションパラメータである "MaxConnect=" を使用して 100~1000 に設定できます。

パラメータ重複の注意事項

複数の INI ファイルを使用する場合は、設定には十分な注意が必要となります。同じパラメータが異なる設定 INI ファイルで設定されている場合、最後に読み込まれたものが優先されますが、US100d ハードウェア設定パラメータには設定を有効にするために再起動が必要なものもあるため、同じパラメータを複数回定義すると、US100d が永久に再起動を繰り返す可能性があります。いずれのパラメータも複数回定義しないこと強く推奨します。

SignOn パラメータとブローカーサーバー接続パラメータの注意事項

SignOn パラメータは以下のブローカーサーバー接続パラメータとの組み合わせにより、動作が異なることに注意してください。ブローカーサーバー接続パラメータは SignOn パラメータが有効 (SignOn=yes) であることが前提で動作します。

- ConnectionBroker
- PnliteServer
- VDIBroker
- Dell vWorkspace

(例) ローカルログオンダイアログ

SignOn=yes

(例) RD 接続ブローカー (MS VDI) 用ダイアログ

SignOn=yes

ConnectionBroker=Microsoft

VDIBroker=https://RDCNB.nec.com/RDWeb/Feed/webfeed.aspx

(例) Citrix 仮想化ホストシステム用ダイアログ(WebInterface 用)

SignOn=yes

PnLiteServer=http://XenApp.nec.com/Citrix/PNAgent/config.xml

(例) Citrix 仮想化ホストシステム用ダイアログ(StoreFront 認証、StoreFront UI 用)

SignOn=yes

PnLiteServer=http://XenDesktop.nec.com/Citrix/Store ¥

StoreFront=yes

(例) VMware View 接続用ダイアログ

SignOn=yes

ConnectionBroker=Vmware

VDIBroker=https://VM.nec.com

(例) Dell vWorkspace 接続用ダイアログ

SignOn=yes

ConnectionBroker=Quest

VDIBroker =vWorkspace.nec.com:8080

SecureMatrix の注意事項

SecureMatrixServer パラメータは SignOn パラメータが有効(SignOn=yes)であること、ブローカーサーバー接続パラメータが有効であることを前提に動作します。

SecureMatrix サーバー認証後、ブローカーサーバー接続ダイアログが表示されます。SecureMatrix サーバーが正しいブローカーサーバーの資格情報を提供可能な設定である場合は、その後のブローカーサーバーへシームレスなログオン(シングルサインオン)が可能です。ブローカーサーバーの資格情報を提供できない場合は、ログオンするためにブローカー資格情報を入力する必要があります。

(例) SecureMatrix サーバー認証経由で RD 接続ブローカー(MS VDI)へ接続する場合

SignOn=yes

ConnectionBroker=Microsoft

VDIBroker=https://RDCNB.nec.com/RDWeb/Feed/webfeed.aspx

SecureMatrixServer=https://SMX-GSB.nec.com

include 文記載時の推奨事項

wnos.ini ファイルの最終行に"include=\$MAC.ini"文を記述することを推奨します。また、MAC 設定 INI ファイルの最終行に"Exit=All"と記載することで、端末固有の設定がグローバル設定に上書きされないことが保障されます。

5. 設定 INI ファイルパラメータ

この章では、設定 INI ファイルで使用できるパラメータを紹介します。以下のガイドラインに従ってください。

記号	説明
角カッコ ([])	角カッコ ([]) はオプションパラメータであることを示します。 注：INI ファイル記載時には角カッコ ([]) をはずしてください。
波カッコ ({ })	波カッコ ({ }) 内は設定値の選択肢を示します。カンマ (,) 等で区切られた値の中から選択して設定してください。 注：INI ファイル記載時には波カッコ ({ }) をはずしてください。
山カッコ (< >)	山カッコ (< >) は任意の設定値を示します。パラメータの説明欄を参照し、使用環境に合わせた値を設定してください。 注：INI ファイル記載時には山カッコ (< >) をはずしてください。
下線	パラメータの値で下線が引いてあるものは、デフォルト値です。オプションパラメータでデフォルト値があるものは自動的に使用されます。デフォルト値のないオプションパラメータは自動的に使用されません。 下記の例では、Option1 には下線つきの値があるので (0 がデフォルト値)、ParameterX を使用すると、Option1 とそのデフォルト値「0」が自動的に使用されます。必要に応じて Option2 を使用することもできますが、デフォルト値がないため、自動的に使用されません。 (例) ParameterX={ <u>yes</u> , no} [Option1={0, 1}] [Option2={1, 2, 3, 4}]
アスタリスク 1個 (*)	wnos.ini および\$MAC.ini ファイルと同じパラメータが{username}.ini に記載されている場合、サインオン時に wnos.ini および\$MAC.ini ファイルのパラメータが優先されます。 注：INI ファイル記載時にはアスタリスク (*) をはずしてください。
アスタリスク 2個 (**)	wnos.ini および\$MAC.ini ファイルと同じパラメータが{username}.ini に記載されている場合、サインオン時にパラメータを上書きします。サインオフ時に wnos.ini および\$MAC.ini ファイルで設定されている値に戻ります。 注：INI ファイル記載時にはアスタリスク (**) をはずしてください。
アスタリスク 3個 (***)	wnos.ini および\$MAC.ini ファイルと同じパラメータが{username}.ini に記載されている場合、サインオン時にパラメータを上書きします。サインオフ時に設定値は保持されます。 注：INI ファイル記載時にはアスタリスク (***) をはずしてください。

※ {username}.ini ファイルが使用できるのはアスタリスク (*/**/****)がついたパラメータのみです。アスタリスクの数でそれぞれ動作が異なります。上記の表を参照してください。

※ INI ファイルによる中央管理の最大のメリットは数 KB 程度の一つの設定 INI ファイルで、大量の端末を一括集中で設定/運用することが可能なことです。設定 INI ファイル1つで大規模なシステムの導入において、端末側の設定・管理に対する工数が大幅に削減できます。但し、導入するシステムによっては、端末個別

の設定を実施したい、ユーザー単位での設定を実施したいなど、端末側の様々な管理が要求される場合があります。\$MAC.ini および{username}.ini を使用することでそれら要求に対する柔軟性が広がりますが、端末の管理はより複雑になります。管理コストを考慮した場合、US100d の管理は極力シンプルにし、一つの設定 INI ファイル(WNOS.INI)で全端末の管理を実施することを推奨しています。

5.1 全般設定

パラメータ	説明
AutoLoad={0, <u>1</u> , 2, 101, 102, 201, 202}	<p>デフォルトは 1 です。</p> <p>AutoLoad — ファームウェア更新モードを指定します。</p> <p>0 — ファームウェアチェックを無効にします。</p> <p>1 — ファームウェアのアップグレード/ダウングレードプロセスの強制実行を有効にします。</p> <p>2 — 比較/任意アップグレードのみのプロセスを有効にします。</p> <p>101 — ファームウェアのアップグレード/ダウングレードプロセスを有効にしますが、実行前に[OK]と[キャンセル]ボタンのあるポップアップメッセージを表示させます。実行後には完了メッセージを表示させます。</p> <p>102 — アップグレードのみを有効にしますが、[OK]と[キャンセル]ボタンのあるポップアップメッセージボックスをプロセス前に表示させます。実行後には完了メッセージを表示させます。</p> <p>201 — ファームウェアのアップグレード/ダウングレードプロセスの強制実行を有効にしますが、実行前に[OK]ボタンのあるポップアップメッセージを表示させます(ただし、20 秒経つとプロセスは実行されます)。実行後には完了メッセージを表示させます。</p> <p>202 — 比較/任意アップグレードのみプロセスを有効にしますが、実行前に[OK]と[キャンセル]ボタンのあるポップアップメッセージを表示させます。実行後には完了メッセージを表示させます。</p>
AutoPower={ <u>no</u> , yes}	<p>デフォルトは no です。</p> <p>シンクライアントに最初に電源を入れたときのシステムの起動方法を yes/no で選択します。</p> <p>yes を設定すると、ユーザーが電源ボタンを押すのを待たずにシステムが起動します。(想定外の電源遮断の場合、想定外の電源遮断の前にシンクライアントが正常にシャットダウンされていたとしても、電源が復旧すると、シンクライアントに電源が入ります。)この設定はキオスク環境での使用に便利です。</p> <p>AutoPower 文が処理されると、取り消し命令文が処理されるまで、本パラメータの設定は維持されます。記述した INI ファイルから AutoPower=yes 文を削除しても、AutoPower=yes 文は有効なままとなります。</p> <p>AutoPower オプションを使用しても、ユーザーが指示するシャットダウンの実行は干渉されません。</p>
DisableButton={ <u>no</u> , yes}	<p>デフォルトは no です。</p> <p>電源ボタン(短押し)を無効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>注: 電源ボタン(長押し)は有効です。</p>
FileServer=List of {<IP Address> or <DNS name>} [Username=<username>] [Password=<password>] [SecurityMode={No, <u>Warning</u> , Full}]	<p>FileServer — シンクライアントのローカルセットアップ(不揮発性メモリ)に入力される FTP または Web(http://) サーバーIP アドレスまたは DNS 名を指定します。シンクライアントは、ファイルへのアクセスにこのサーバーを即座に使用します。</p> <p>Username — ファイルサーバーのユーザー名を指定します。</p> <p>Password — ファイルサーバーのパスワードを指定します。</p> <p>注: 対象ファイルサーバーは、INI ファイルで使用されているものと同じユーザー認証情報を使用したアクセスをサポートしている必要があります。</p> <p>SecurityMode — デフォルトは Warning です。サーバー証明書のクライアント検証時におけるファイルサーバーのセキュリティレベルを指定します。本オプションは、https ファイルサーバーへの接続時のみ有効です。https ファイルサーバー設定時には、FileServer パラメータの Username および Password オプションを省略することができます。</p> <p>以下を使用します。</p> <p>クライアントにおいてサーバーの証明書を最高のセキュリティモードで検証するには、SecurityMode=Full を設定します。検証中に何らかのエラーが発生した場合、クライアントはサーバーに接続せず、リブートオプ</p>

パラメータ	説明
	<p>ションを含むポップアップメッセージが表示されます。</p> <p>(デフォルト)クライアントがサーバー証明書を検証できない場合、クライアントに警告を表示させるが、ユーザーがサーバーへのクライアント接続の続行を選択できるようにするには、SecurityMode=Warning を設定します。</p> <p>サーバー証明書を検証せずにクライアントをサーバーに接続させるには、SecurityMode=No を設定します。</p> <p>注:セキュリティプロセスには以下の工程が含まれています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 証明書の有効な日付の検証 2. 発行者が有効で正しいことの検証 3. 証明書検証合格 4. 証明書の CN と SAN が DNS 名に一致 <p>例: FileServer=https://10.151.122.66:444 SecurityMode=warning</p>
RootPath=<file server root path>	<p>このファイルサーバーのルートパスは、シンクライアントの不揮発性メモリに保存されているローカル設定にコピーされます。シンクライアントは、このパスを使用してすぐにファイルにアクセスします。使用する前にディレクトリ名¥wnos をファイルサーバーのルートパスに追加します。</p>
Include=\$MAC.ini	<p><\$MAC.ini> 「/wnos/inc/mac-address.ini」を読み込みます。</p> <p>注:ファイル名には mac アドレスの記号「:」は含まれません。</p> <p>Include の終了方法については、Exit パラメータも参照してください。</p>
PlatformConfig="C/V/S/R/T Class" [Firmware=<Firmware filename>] [ECFirmware=<EC filename>]	<p>PlatformConfig パラメータで特定のプラットフォームを指定すると、US100d が Firmware によってファイル名が指定されているファームウェアを読み込もうとします。記述されているファームウェアがファイルサーバーで有効な場合は、デフォルトではこれらが読み込まれます。記述されているファームウェアがファイルサーバーで無効な場合は、US100d がプラットフォームのデフォルトのファームウェアを代わりに読み込みます。</p> <p>ECFirmware は、EC ファームウェアを更新するために使用されます。</p> <p>US100d は T10 に該当するため、「T Class」を指定します。</p> <p>C:C10 V:VL10 S:S10 R:R10 T:T10</p> <p>ECFirmware ファイル名が未指定の場合、デバイスはデフォルト名 T10:T10_EC.bin で EC を検索します。</p>
FormURL=<URL to a file>	<p>シンクライアントのホームディレクトリ内にあるビットマップファイルの名前 (.ico、.bmp、.jpg、または.gif) への URL をサインオンウィンドウに表示するよう指定します。ホームディレクトリとファイルを含むパスの長さは、最大 128 文字です。自動ダイアルアップが有効な場合、この文は無効です。</p>
FactoryDefault={no, yes}	<p>デフォルトは no です。</p> <p>システム設定を工場出荷時の状態にリセットするかどうかを yes/no で選択します。本オプションは、ファームウェアの変更のたびに 1 回のみ初期化されます。ただし、no を設定してリポートすると、オプションを再度初期化できません。</p> <p>注:FactoryDefault パラメータ値を yes に変更した場合は、シンクライアントはユーザーへの通知なしにリポートされます。</p> <p>※本パラメータは動作しません。使用しないでください。</p>
EnableGKey={yes, no}	<p>デフォルトは yes です。</p> <p>G キーリセットを有効にするかどうかを yes/no で選択します。G キーリセットは、NVRAM の Privilege=High の時にサポートされています。</p>

パラメータ	説明
Locale={English us French fr German de Chinese Simplified gb Chinese Traditional b5 Japanese jp Korean ko Spanish Mexican la} [load={yes no}]	<p>Locale — システム言語を指定します。</p> <p>注:[Locale]で変更されるのは、ブートアップおよびログオン時に表示されるユーザーログオンエクスペリエンス画面の言語のみです。設定または管理者画面の言語は変更されません。</p> <p>load=yes/no は、言語ファイルを読み込むかどうかを指定します。言語ファイルはロケール名で終え、ファイルサーバーの wnos/locale フォルダに保存します。たとえば、French を指定してローカライズされたメッセージを読み込む場合は、ファイルサーバーの wnos/locale フォルダに French.msg というファイルを保存し、INI ファイルに Locale=French load=yes を追加します。</p> <p>重要: 簡体中国語、繁体中国語、日本語、韓国語のローカリゼーションでは、ファイルサーバーの wnos/font フォルダにもフォントファイルを保存する必要があります。たとえば、日本語をシステム言語に指定する場合は、Japanese.msg というファイルをファイルサーバーの wnos/locale フォルダに保存し、Japanese.fnt というファイルをファイルサーバーの wnos/font フォルダに保存し、INI ファイルに Locale=Japanese load=yes を追加します。</p> <p>注:HTTP/HTTPS ファイルサーバー使用時は、拡張子「.msg」、「.fnt」を MIME の種類(application/octet-stream)に登録する必要があります。</p>
LocaleList={English us French fr German de Chinese Simplified gb Chinese Traditional b5 Japanese jp Korean ko Spanish Mexican la}	<p>LocaleList — ユーザーがシステム言語を必要に応じて切り替えられるようにロケールのリストを指定します。すべての値が GUI([システム設定] -> [全般] -> [ロケール])に表示されます。German.msg、Japanese.msg、Japanese.fnt などの必要なファイルは、必ず Locale パラメータの説明で説明されている正しいフォルダに保存してください。</p>
EnableCachelni={ no , yes}	<p>デフォルトは no です。</p> <p>すべてのサーバーファイルをキャッシュする(ファイルサーバーでファイルを変更したときに、INI ファイル、壁紙、ビットマップ、フォント、ローカルメッセージなどのすべてのサーバーファイルをローカルフラッシュメモリにキャッシュする)機能を有効にするかどうかを yes/no で選択します。ファイルサーバーのファイルを利用できない場合、US100d は、キャッシュしたファイルを使用します。</p>
**EnableLocal={ no , yes} [HideDefault={ no , yes}]	<p>デフォルトは no です。</p> <p>ローカル設定した項目を接続マネージャーリストに表示するかどうかを yes/no で選択します。ローカル NVRAM で定義した接続を接続マネージャーで表示する場合は、「*」(アスタリスク)がつきます。wnos.ini ファイルで EnableLocal=yes を記述すると、グローバル情報が NVRAM に保存されます。</p> <p>グローバル情報には、wnos.ini ファイルの SEAMLESS、ALTERNATE、Reconnect、IcaBrowsing、LowBand、NoReducer、Time 設定、Printer 設定などがあります。</p> <p>HideDefault — デフォルトは no です。デバイスにあるデフォルトの ICA および RDP 接続を非表示にするかどうかを yes/no で選択します。</p>
***Exit={ yes , no, all}	<p>デフォルトは yes です。</p> <p>INI ファイルの処理を指定します。</p> <p>yes — 前の INI ファイルに記述されている\$include の次の行に戻ります。</p> <p>no — 何も行いません。</p> <p>all — すべての INI ファイル処理を終了します。</p>
**Inactive={ 0 , 10-480}	<p>デフォルトは 0 です。</p> <p>タイムアウトになるまでのインアクティブ時間を指定します。0 を設定すると、アイドル時間なしでタイムアウトします。インアクティブ時間の範囲は、10 分~480 分の間で設定できます。</p>
RTPTosDscp={Default/CS1 /CS2/CS3/CS4/CS5/CS6/CS7/AF 11/AF12/AF13/AF22/AF23/AF31 /AF32/AF33/AF42/AF43}	<p>音声伝送プロトコル (Real-time Transport Protocol) のパケット優先度を割り当てます。</p>

5.2 管理者モード

パラメータ	説明
AdminMode={no, yes} [admin-username=<encrypted_username>] [admin-password=<encrypted_password>] [Username=<username>] [Password=<password>]	<p>デフォルトは no です。</p> <p>AdminMode — Privilege パラメータレベルを Low または None に設定している場合に、管理者モード(High 権限)の取得にユーザー名とパスワードを使用するかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>admin-username — admin-username=encrypted_username の場合に admin-username で暗号化された文字列を使用することを指定します。</p> <p>admin-password — admin-password=encrypted_password の場合に admin-password で暗号化された文字列を使用することを指定します。</p> <p>注: Username と Password の文字列の最大長は Single Byte で 15 文字です。暗号化後の文字列の最大長は、15 文字から変換した場合、最大で Single byte の 30 文字になります。文字列の最小長についての制限はありません。</p> <p>注: AdminMode の項目は、クラシックデスクトップモード使用時は右クリックメニューにあります。ZERO ラウンチパッドモード使用時は、SignOn=yes の場合はログオンダイアログに AdminMode アイコンがあります。SignOn=no の場合は、[システム設定]メニューの右上に管理モードアイコンがあります。</p>

5.3 使用許諾契約書

パラメータ	説明
NoticeFile=<filename> [Resizable={ <u>no</u> , yes}] [Timeout={ <u>0</u> , 10-600}] [Title="notice_title"] [ButtonCaption="button_caption"]	NoticeFile — ホームディレクトリフォルダ内の法的通知ファイルを指定します。ファイルがダイアログボックスに表示され、サインオンプロセスを続行する前に同意を求めるプロンプトが表示されます。 Resizable — デフォルトは no です。テキストのサイズに合わせてダイアログボックスのサイズを変更するかどうかを yes/no で選択します。 Timeout — デフォルトは 0 です。通知に同意した後、Timeout(秒)が指定されており、マウスとキーボードを使用していない場合は、設定した秒数後、ダイアログボックスが再表示されます(0 はタイムアウトなし)。 Title、ButtonCaption — 通知ウィンドウのタイトルとボタン(カスタマイズ可能)を指定します。 例: NoticeFile=filename Title=Problem ButtonCaption=Ok

5.4 ローカル権限

パラメータ	説明
PRIVILEGE={None, Low, High } [LockDown={ no , yes}] [HideSysInfo={ no , yes}] [HidePN={ no , yes}] [HideConnectionManager={ no , yes}] [EnableNetworkTest={ no , yes}] [EnableTrace={ no , yes}] [ShowDisplaySettings={ no , yes}] [EnableKeyboardMouseSettings={no, yes}] [KeepDHCPRequestIP={ no , yes}] [SuppressTaskBar={ no , yes, auto}] [EnablePrinterSettings={ no , yes}] [CoreDump={ide, disabled}] [EnableNetworkSetup={yes, no}] [DisableNetworkOptions={yes, no }] [EnableSystemPreferences={yes,no}] [DisableTerminalName={yes, no}] [DisableSerial={yes, no}]	<p>デフォルトは high です。</p> <p>Privilege は、ユーザー権限を変更し、端末へのアクセスを制御します。</p> <p>None — このアクセスレベルは、キオスクなどの限定使用配備で一般的です。デスクトップメニューの[システム設定]は無効です。デフォルトでは、接続マネージャーは無効です。接続マネージャーは、HideConnectionManager=no オプションを使用して有効にする(表示させる)事ができますが、ユーザーが新しい接続を作成したり既存の接続を編集したりすることはできません。ユーザーは、工場出荷時の状態にシンクライアントをリセットできません。</p> <p>Low — このアクセスレベルは、一般ユーザーに割り当てられます。[システム設定]サブメニューの[ネットワーク設定]は無効です。ユーザーは、工場出荷時の状態にシンクライアントをリセットできません。</p> <p>High — 管理者アクセスレベルでは、すべてのシンクライアントリソースを制限なしに利用できます。ユーザーは、工場出荷時の状態にリセットすることができます。</p> <p>注: None または Low を使用した場合は、「ネットワーク設定」ダイアログボックスが無効になります。しかし、状況によっては「ネットワーク設定」ダイアログにアクセスする必要があるかもしれません。その場合、ネットワークコネクタを外し、スタンドアロンモードで US100d を起動してください。デフォルト権限 High で動作し、「ネットワーク設定」ダイアログにアクセスできます。ただし、これは後述の LockDown パラメータにより、NVRAM に None または Low 権限を保存していない場合に限りです。</p> <p>LockDown — デフォルトは no です。シンクライアントのロックダウンを許可するかどうかを yes/no で選択します。yes を指定すると、システムがフラッシュメモリに権限レベルを保存します。no を指定すると、システムがフラッシュメモリの権限レベルをクリアし、デフォルトのロックされていない状態に戻します。</p> <p>注: High 権限ではない状態で、シンクライアントが LockDown に設定されている場合、G キーリセットは電源投入時に無効になります。</p> <p>注: LockDown を使用すると、シンクライアントのデフォルト権限を設定できます。たとえば、LockDown=yes の場合、権限は永久レジストリに保存されます。LockDown=no の場合、権限レベルは永久レジストリでデフォルトの high に設定されます。つまり、システムは永久レジストリに格納されているデフォルトの High 権限レベルを持つことになります。wnos.ini ファイルまたは{username}.ini ファイルに権限を指定していない場合や、ネットワークを利用できない場合に、LockDown の設定(永久レジストリに保存された権限レベル)が有効になります。</p> <p>たとえば、wnos.ini ファイルまたは{username}.ini ファイルに privilege=<none low high> lockdown=yes を記述すると、デフォルト権限が指定レベルに設定されます。</p> <p>HideSysInfo — デフォルトは no です。システム情報をビューで非表示にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>HidePN — デフォルトは no です。タスクバーから PNAgent または PNLite アイコンをビューで非表示にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>HideConnectionManager — デフォルトは no です。接続マネージャーウィンドウをビューで非表示にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>注: 前述のように、Privilege=none の場合、デフォルトでは接続マネージャーは無効ですが、HideConnectionManager=no を使用して有効(表示)にできます。ただし、ユーザーが新しい接続を作成したり既存の接続を編集したりすることはできません。</p>

パラメータ	説明
(つづき)	<p>EnableNetworkTest — デフォルトは no です。ネットワークテストを有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>EnableTrace — デフォルトは no です。トレース機能を有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>(Privilege=High レベルでは、アクティブな項目がデスクトップのクリックメニューに追加されます。)</p> <p>ShowDisplaySettings — デフォルトは no です。ポップアップメニューで [ディスプレイ] を有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>EnableKeyboardMouseSettings — キーボードとマウスの個人設定を有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>KeepDHCPRequestIP — デフォルトは no です。要求が失敗し「ネットワーク設定」ダイアログボックスが表示されても、DHCP サーバーにリクエストを送信し続けるかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>SuppressTaskBar — デフォルトは no です。タスクバーを非表示にするかどうかを yes/no/auto で選択します。auto を選択すると、使用中タスクバーの非表示と表示が自動的に切り替わります。wnos.ini ファイルで EnableLocal を yes に設定している場合に、wnos.ini ファイルで本パラメータを使用すると、本パラメータは NVRAM に保存されます。</p> <p>EnablePrinterSettings — デフォルトは no です。Privilege=None のユーザーに対してプリンタ設定を有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>CoreDump — 「CoreDump=disabled」と記述すると、コアダンプ機能が無効になります。</p> <p>注: 通常のトラブルシューティングでは使用しません。特別に依頼があったときのみ使用します。</p> <p>EnableNetworkSetup — ネットワークセットアップを有効または無効にします。</p> <p>DisableNetworkOptions — ネットワークオプションを有効または無効にします。</p> <p>EnableSystemPreferences — システム個人設定を有効または無効にします。</p> <p>DisableTerminalName — 端末名を有効または無効にします。</p> <p>注: DisableTerminalName パラメータは現在正常に動作しません。使用しないでください。</p> <p>DisableSerial — 周辺機器のシリアルテーブルを有効または無効にします。</p> <p>注: Privilege={none, low} とともにオプションの EnableNetworkSetup=yes を設定すると、セットアップが有効になります。オプションの DisableNetworkOptions=yes を同時に設定すると、Options テーブルが無効になります。</p> <p>Privilege={none, low} とともにオプションの EnableSystemPreferences を yes に設定すると、システム個人設定セットアップが有効になります。</p> <p>Privilege={none, low} とともに、オプションの DisableSerial を yes に設定すると、周辺機器セットアップのシリアルテーブルが有効になります。</p>

5.5 シャットダウンと再起動

パラメータ	説明
Reboot={ no , yes} [Time=<hh:mm> [-hh:mm]]	<p>デフォルトは no です。</p> <p>Reboot — すべての US100d デバイスを毎日自動でリブートするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>Time — リブート時間を 24 時間形式で指定します。</p> <p>例: Reboot=Yes Time=17:30 を指定すると、すべての US100d デバイスが毎日 5:30 P.M.にリブートされます。</p> <p>[-hh:mm]を設定することで、2 つの時間の間でランダムに再起動します。</p> <p>例) Reboot=yes time=20:30-4:30</p>
**AutoSignoff={ no , yes} [Shutdown={ no , yes}] [Reboot={ no , yes}]	<p>デフォルトは no です。</p> <p>AutoSignoff — 最後に関いたセッションを閉じた後にユーザーを自動的にサインオフするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>Shutdown — デフォルトは no です。シンクライアントをシャットダウンするかどうかを yes/no で選択します。Shutdown を yes に設定した場合は、ShutdownCounter の値を使用して、システムのシャットダウンまでのカウントダウンを制御できます。</p> <p>Reboot — デフォルトは no です。シンクライアントをリブートするかどうかを yes/no で選択します。Reboot を yes に設定した場合は、ShutdownCounter の値を使用して、システムのリブートまでのカウントダウンを制御できます。</p>
**ShutdownCount={0-60} または **ShutdownCounter={0-60}	<p>ShutdownCount、ShutdownCounter — アクティブなセッションがある状態でシンクライアント電源ボタンを使用したときの、シャットダウンシーケンスが始まるまでの秒数を指定します。デフォルトは 10 です。ただし、シャットダウンを即座に開始してカウントダウンポップアップダイアログボックスを表示しない場合は、0 を設定します。</p>

5.6 証明書

パラメータ	説明
AddCertificate=<filename> [password=<password>] [Password-enc=<encrypted_password>]	<p>AddCertificate — NAND フラッシュメモリデバイス(NAND フラッシュメモリのあるプラットフォームの場合)またはメモリに読み込む wnos フォルダの cacerts サブフォルダにある証明書ファイルを指定します。ファイル拡張子を含むファイル名の長さは、最大 64 文字です。</p> <p>組み込み証明書でカバーされていない証明書エージェントをユーザーの CSG 環境で使用する場合は、証明書を追加する必要があります。証明書は、サーバーID の有効性を確認するためにシンクライアントが使用します。</p> <p>ICA CSG の.crt ファイル、802.1x の.cer や.pfx などのファイルをサポートしています。</p> <p>Password と Password-Enc — PFX ファイルで特別な場合に使用します。</p> <p>注: PFX ファイルをエクスポート時に「強力な保護を有効にする」を有効(デフォルト)にした証明書をインポートすると、US100d と互換性がないため、たとえば EAP-TLS 認証で PFX 使用時にユーザー認証に失敗します。PFX ファイルエクスポート時には「強力な保護を有効にする」を無効にしてください。</p>
DelCertificate={<filename>, all, builtin }	<p>NAND フラッシュメモリまたはメモリから名前付きファイルを削除します。</p> <p>DelCertificate=ALL を指定すると、組み込み証明書を除くすべての証明書がフラッシュメモリから削除されます。</p> <p>DelCertificate=builtin を指定すると、。既定で含まれているビルトイン証明書が全て削除されます。</p>

5.7 TSCAL License

パラメータ	説明
FixLicense={Factory, clean, yes, no , OldFormat}	デフォルトは no です。 不揮発性メモリに格納している TSCAL ライセンスを置き換えるかどうかを指定します。 注: OldFormat の値は、バージョン 5.2.x と同じライセンス形式を維持するよう設定します。
ClearLicense={ no , yes}	デフォルトは no です。 不揮発性メモリに格納している TSCAL ライセンスをクリアするかどうかを yes/no で選択します。 これは FixLicense=clean に置き換えることができます。

5.8 デスクトップモード

パラメータ	説明
SysMode={ classic , vdi} [toolbarisable={ no , yes}] [toolbarisablemouse={ no , yes}] [toolbarclick={ no , yes}] [toolbardelay={0-4}] [toolbar_no_conmgr={ no , yes}] [toolbar_no_minimizeall={ no , yes}] [toolbarisablehotkey={ no , yes}] [ToolbarEnableOneSession={ no , yes}] [ToolbarAutoQuit={ yes , no}] [ToolbarStay={1-20}]	<p>SysMode — VDI 向けに最適化された新しい ZERO ランチパッドモードまたはクラシックデスクトップモードを指定します。この値は、変更されない限りリブート後も記憶されます。未定義で INI がある場合は、クラシックモードがデフォルトになります。INI がない場合は、前回起動時のモードで起動されます。(INI ファイルをまだ一度も読み込んだことがない端末の場合はクラシックデスクトップモードで起動されます。)</p> <p>クラシックモードには完全なタスクバー、デスクトップ、接続マネージャーがあります。</p> <p>VDI モードは、全画面セッション(デスクトップ)向けに最適化されている新しいランチパッド形式のインタフェースです。常に利用可能なオーバーレイインタフェースにより、必要なすべてにアクセスできます。</p> <p>以下のオプションを使用すると、VDI モードで ZERO ツールバーを表示する場合を設定できます。</p> <p>Toolbarisable — デフォルトは no です。ZERO ツールバーの表示を無効にするかどうかを yes/no で選択します (yes を設定した場合、このオプションが他のツールバー表示オプションよりも優先されます)。</p> <p>注: Toolbarisable パラメータは現在正常に動作しません。使用しないでください。</p> <p>Toolbarisablemouse — デフォルトは no です。指定時間マウスポインタを画面の左側に置いた場合の ZERO ツールバーの自動表示を無効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>注: Toolbarisablemouse パラメータは現在正常に動作しません。使用しないでください。</p> <p>toolbarclick — デフォルトは no です。画面の最も左をクリックした場合のみツールバーをポップアップ表示するかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>注: toolbarclick パラメータは現在正常に動作しません。使用しないでください。</p> <p>toolbardelay — 画面の最も左にマウスポインタを置いてからツールバーが表示されるまでの時間を秒数で指定します。値 0 を指定した場合、遅延はありません。他の 1、2、3、4 を指定した場合、遅延はそれぞれ 0.5、1、1.5、2 秒になります。</p> <p>注: toolbardelay パラメータは現在正常に動作しません。使用しないでください。</p> <p>toolbar_no_conmgr — デフォルトは no です。ホームボタンを非表示にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>toolbar_no_minimizeall — デフォルトは no です。ホームボタンを非表示にするかどうかを yes/no で選択します。表示される接続リストを最小化する能力に影響します。</p> <p>toolbarisablehotkey — デフォルトは no です。タイマーなしでツールバーを即座に表示する CTR+ALT+上矢印ホットキーを無効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>注: toolbarisablehotkey パラメータは現在正常に動作しません。使用しないでください。</p> <p>ToolbarEnableOneSession — デフォルトは no です。利用可能なセッションが 1 つしかない場合にツールバーを有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>ToolbarAutoQuit — デフォルトは yes です。ToolbarAutoQuit=no の場合、サブウィンドウは閉じられません。ユーザーがマウスポインタをツールバーから一定時間離すと、ツールバーが自動的に非表示になります。</p> <p>ToolbarStay — ToolbarStay={1~20}は、値ごとに 0.5 秒間隔で自動非表示時間を制御します。ToolbarStay=1 の場合、ツールバーは 0.5 秒後に自動的に非表示になります。ToolbarStay=10 の場合、ツールバーは 5 秒後に自動的に非表示になります。</p>

5.9 キーボード

パラメータ	説明
***KeySequence={no, yes} [Ctrl+Alt+Del={no, yes}] [Ctrl+Alt+Up={no, yes}] [Ctrl+Alt+Down={no, yes}] [Ctrl+Alt+Left={no, yes}] [Ctrl+Alt+Right={no, yes}] [Win+L={no, yes}]	<p>KeySequence — キーコンビネーションオプションを有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>注: KeySequence=no の場合、キーコンビネーションがすべて無効になるわけではありません。デフォルトの設定で動作します。</p> <p>Ctrl+Alt+Del — デフォルトは no です。ユーザーがパスワードを使用してログインする場合に Ctrl+Alt+Del でシンクライアントをロックするかどうかを yes/no で選択します。ユーザーがパスワードなしでログインしている場合は、このキーシーケンスは機能しません。</p> <p>Ctrl+Alt+Up — デフォルトは yes です。ZERO ランチパッドモードの場合、Ctrl+Alt+上矢印でZERO ツールバーを表示します。Classic デスクトップモードの場合、Ctrl+Alt+上矢印でセッションを全画面モードとウィンドウモード間で切り替えるかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>注: Classic デスクトップモード時に Ctrl+Alt+Up パラメータは現在動作しません。Ctrl+Alt+Up=yes を記載してもウィンドウモードは切り替えできません。</p> <p>Ctrl+Alt+Down — デフォルトは yes です。Ctrl+Alt+下矢印でタスクの選択を切り替えるかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>Ctrl+Alt+Left — デフォルトは yes です。ユーザーがパスワードを使用してログインする場合に Ctrl+Alt+左矢印でシンクライアントをロックするかどうかを yes/no で選択します。ユーザーがパスワードなしでログインしている場合は、このキーシーケンスは機能しません。</p> <p>Ctrl+Alt+Right — デフォルトは yes です。ユーザーがパスワードを使用してログインする場合に Ctrl+Alt+右矢印でシンクライアントをロックするかどうかを yes/no で選択します。ユーザーがパスワードなしでログインしている場合は、このキーシーケンスは機能しません。</p> <p>Win+L — Win+L キーで端末をロックします。US100d にローカルにサインオンした場合のみ有効になります。</p>
**RepeatRate={0, 1, 2}	<p>キーボードの繰り返し速度を指定します。</p> <p>0 — 低速</p> <p>1 — 中速(デフォルト)</p> <p>2 — 高速</p>
**RepeatDelay={0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7}	<p>繰り返しまでのキーボード遅延を指定します(秒単位)。</p> <p>0 — 1/5</p> <p>1 — 1/4</p> <p>2 — 1/3(デフォルト)</p> <p>3 — 1/2</p> <p>4 — 3/4</p> <p>5 — 1</p> <p>6 — 2</p> <p>7 — 繰り返しなし</p>

パラメータ	説明
<pre> **Device=keyboard [numlockoff={no, yes}] [repeatrate={0, 1, 2}] [repeatdelay={0, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7}] </pre>	<p>Device — ローカルキーボードを指定します。</p> <p>numlockoff — デフォルトは no です。キーボードの NumLock をオフにするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>repeatrate — キーボードの繰り返し速度を指定します。</p> <p>0 — 低速 1 — 中速(デフォルト) 2 — 高速</p> <p>repeatdelay — 繰り返し前のキーボード遅延を指定します(秒単位)。</p> <p>0 — 1/5 1 — 1/4 2 — 1/3(デフォルト) 3 — 1/2 4 — 3/4 5 — 1 6 — 2 7 — 繰り返しなし</p> <p>注: wnos.ini ファイルで EnableLocal=yes を設定している場合、wnos.ini ファイルの上記設定は NVRAM に保存されます。</p>

パラメータ	説明
<pre> **Language=<code> [Charset={ISO-8859-1, ISO-8859-2, ISO-8859-5, ISO-8859-7}] [ImageSuffix={us, fr, de, gb, b5, jp, ko, la, default}] </pre>	<p>Language — 使用するキーボードの言語を指定します。wnos.ini ファイルで本設定を指定後は、不揮発性メモリに保存されます。使用するコードは、以下のキーボード言語リストの文字列と同じにする必要があります。</p> <p>Charset — 使用する ISO オプションを指定します。</p> <p>注: 日本語版 WTOS は文字コードが Shift-JIS に固定されており、変更できません。本パラメータは英語版 WTOS のみ設定可能です。</p> <p>ISO-8859-1 — ISO-8859-1 — (デフォルト)ラテンアルファベットの標準文字エンコーディングのパート 1 をサポートします。</p> <p>ISO-8859-2 — デスクトップ表示でチェコ語、ハンガリー語、ポーランド語、ルーマニア語、スロベニア語をサポートします。</p> <p>ISO-8859-5 — デスクトップ表示でキリル文字をサポートします。</p> <p>ISO-8859-7 — デスクトップ表示でギリシア語をサポートします。</p> <p>キーボード言語リスト - 説明とコード</p> <p>アラビア語 (サウジアラビア) — Ar_sau アラビア語 (イラク) — Ar_ira アラビア語 (エジプト) — Ar_egy アラビア語 (リビア) — Ar_lib アラビア語 (アルジェリア) — Ar_alg アラビア語 (モロッコ) — Ar_mor アラビア語 (チュニジア) — Ar_tun アラビア語 (オマーン) — Ar_oma アラビア語 (イエメン) — Ar_yem アラビア語 (シリア) — Ar_syr アラビア語 (ヨルダン) — Ar_jor アラビア語 (レバノン) — Ar_leb アラビア語 (クウェート) — Ar_kuw アラビア語 (アラブ首長国連邦) — Ar_uae アラビア語 (バーレーン) — Ar_bah アラビア語 (カタール) — Ar_qat ブラジル語 — Br カナダ語 (多言語) — ca_ml 中国語 (簡体) — Gb 中国語 (繁体) — b5 クロアチア語 — Croat チェコ語 — Cz デンマーク語 — Dk オランダ語 — NI オランダ語 (ベルギー) — NI_be オランダ語 (ベルギーコンマ) — NI_be_c 英語 (3270 オーストラリア) — au3270 英語 (オーストラリア) — Au 英語 (ニュージーランド) — Nz 英語 (英国) — UK 英語 (米国) (デフォルト) — Us フィンランド語 — Fi フランス語 (ベルギー) — fr_be フランス語 (ベルギーコンマ) — fr_be_c フランス語 (カナダ) — fr_ca フランス語 (フランス) — Fr フランス語 (スイス) — fr_sf ドイツ語 — De ドイツ語 (IBM) — de_ibm ドイツ語 (スイス) — de_sg ギリシア語 — el ハンガリー語 — Hu イタリア語 — It イタリア語 (スイス) — it142 日本語 — Jp 日本語_109a — Jp_109a 韓国語 — Ko 韓国語 (MS-IME2002) — ko_ime</p>

パラメータ	説明
(つづき) **Language=<code> [Charset={ISO-8859-1, ISO-8859-2, ISO-8859-5, ISO-8859-7}] [ImageSuffix={us, fr, de, gb, b5, jp, ko, la, default}]	ノルウェー語 — No ポーランド語(214)— Pl ポーランド語プログラマ — pl_prog ポルトガル語 — Pt ポルトガル語(ブラジル)— Pt2 ルーマニア語 — Ro ロシア語 — Ru スロバキア語 — Slovak スロバキア語(クワータイ)— sk_q スロベニア語 — Sloven スペイン語 — Es スペイン語(メキシコ)英語 — La(us) スペイン語(メキシコ)ローカライズ — La スウェーデン語 — Se トルコ語 — Turk トルコ語(クワータイ)— turk_q 英語(国際)— us_int ImageSuffix — ローカリゼーションビルドは、以下のようにキーボード言語によってサフィックスが異なります。 jp(日本語) gb(簡体中国語) b5(繁体中国語) ko(韓国語) la(メキシコスペイン語) デフォルトでは、上記のキーボード言語について、システムは言語コードを含むサフィックスに従って標準イメージ(ファームウェア)を更新します。他のキーボード言語では、システムはサフィックスを指定せずに標準イメージを更新します。 たとえば、Language=jp を設定すると、システムは日本語ローカリゼーションビルドである DOVE_boot.jp というイメージを更新します。 Language=us 設定すると、システムは DOVE_boot というイメージを更新します。 ImageSuffix オプションは、デフォルト動作を望まない場合に、イメージ名のサフィックスを指定できます。

5.10 マウス

パラメータ	説明
**MouseNewSpeed={1-9}	デフォルトは 6 です。 1~9 の範囲でマウスの速度を指定します。1 が最も低速で、9 が最も高速です。
**MouseSwap={0, 1}	マウスボタンを切り替えるかどうかを選択します(左利き用など)。 0 — なし 1 — あり
**DisableMouse={ <u>no</u> , yes} or **MouseDisable={ <u>no</u> , yes}	DisableMouse — デフォルトは no です。マウスポインタを無効にして画面に表示するかどうかを yes/no で選択します。マウスを操作すると、ポインタは有効になります。 または MouseDisable — デフォルトは no です。マウスポインタを無効にして画面に表示するかどうかを yes/no で選択します。マウスを操作すると、ポインタは有効になります。

5.11 オーディオ

パラメータ	説明
***Device=audio [volume={low, middle , high} or {0-25}] [mute={ 0 , 1, 2, 3}] [mic_vol={high, middle , low} or {0-25}] [mic_mute={ 0 , 1}] [min_cache={ 1 -50}]	ローカルシンクライアントの音量を指定します volume= high — 最大音量 middle — 中程度の音量(デフォルト) low — 最小音量 0~25 の値を指定すると、より正確な音量を指定できます。 mute= 0 — ミュートなし(デフォルト) 1 — 音声ミュート 2 — 音声とシステム警告音をミュート 3 — システム警告音をミュート mic_vol= high — 最大音量 middle — 中程度の音量(デフォルト) low — 最小音量 0~25 の値を指定すると、より正確な音量を指定できます。 mic_mute= 0 — ミュートなし(デフォルト) 1 — 音声ミュート 「min_cache={1 - 50}」, 「min_cache」は、音声再生の最小バッファリング量を設定します(10ms 単位)。「min_cache」は、ネットワーク帯域幅がオーディオをスムーズに再生するには不十分な場合に使用します。 このような場合、US100d がオーディオを再生する前により多くのオーディオデータをバッファに記憶するように、「min_cache」に大きい値を設定します。 「min_cache」のデフォルトは 1 です。 1 - US100d は、オーディオ再生時に 10ms 以上のオーディオデータをバッファに記憶します 50 - US100d は、オーディオ再生時に 500ms(0.5s) 以上のオーディオデータをバッファに記憶します。
***MicBoost={ no , yes}	デフォルトは no です。 内蔵マイクブーストを有効にするかどうかを yes/no で選択します。

5.12 カメラ

パラメータ	説明
<pre> ***Device=camera [format=raw] [width=<camera supported width>] [height=<camera supported height>] [fps=<camera supported fps>] [optimize={no, yes}] </pre>	<p>ローカルシンクライアントのカメラ設定を指定します。</p> <p>注: Web カメラは試験的機能のため、動作保障されておりません。</p> <p>format — RAW ビデオ形式のみをサポートします (format=raw は固定です)。</p> <p>width — ローカルカメラがサポートする解像度の幅。</p> <p>height — ローカルカメラがサポートする解像度の高さ。</p> <p>fps — ローカルカメラがサポートする解像度の fps (フレーム/秒)。</p> <p>optimize — 10 fps の 320 x 240 で幅、高さ、fps を最適化するかどうかを yes/no で選択します。optimize=yes の場合は、幅、高さ、fps の個々の設定にかかわらず、10 fps の 320 x 240 がローカルカメラ設定に使用されず (カメラが 10 fps の 320 x 240 をサポートしている場合)。</p> <p>optimize=yes 設定時でカメラが 10 fps の 320 x 240 設定をサポートしていない場合は、US100d のイベントログにエラーが表示されます。</p> <p>optimize=no (デフォルト) の場合は、幅、高さ、fps の個々の設定が使用されます (カメラがサポートしている場合)。</p>

5.13 ディスプレイ

パラメータ	説明
DesktopColorDepth={16, 32}	DesktopColorDepth — デスクトップの色を 16 ビットまたは 32 ビットに設定します。DesktopColorDepth=16 を指定した場合、デフォルト色は 15 ビットです。
Dualhead={ no , yes} [ManualOverride={ no , yes}] [Mainscreen={1, 2}] [Orientation={ hort , vert}] [Align={Top Left, Center, Bottom Right}] [Taskbar={ wholescreen , mainscreen}] [MonitorAutoDetect={yes,no}] [Swap={ no , yes}]	<p>デフォルトは no です。</p> <p>Dualhead — デュアルモニターの表示を可能にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>ManualOverride — デフォルトは no です。中央の設定から受け取ったディスプレイのデュアルヘッド設定をローカルクライアントで上書きできるかどうかを選択します(工場出荷時の状態にリセットすると、デュアルヘッドのサーバー設定が復活します)。これは、デュアルヘッドとシングルヘッドの配備が混在するシナリオで便利です。</p> <p>例: Dualhead=yes ManualOverride=yes</p> <p>Mainscreen — メイン画面として使用する画面を設定します。DVI-DVI ケーブルと VGA ケーブルを使用する場合、DVI 接続モニターはデフォルトの mainscreen=1 となります。</p> <p>Orientation — デフォルトは hort です。使用する表示スタイルを設定します(hort は水平、vert は垂直を意味します)。</p> <p>Align — 画面の並べ方を設定します。「hort」の向きに画面を上部分で揃える場合は、[Top]を選択します。「vert」の向きに画面を左部分で揃える場合は、[Left]を選択します。</p> <p>中央で揃える場合は、[Center]を選択します。「hort」の向きに画面を下部分で揃える場合は、[Bottom]を選択します。「vert」の向きに画面を右部分で揃える場合は、[Right]を選択します。</p> <p>Taskbar — デフォルトは wholescreen です。使用するタスクバーのスタイルを設定します。「wholescreen」を選択すると、画面全体の下部にタスクバーが配置されます。「mainscreen」を選択すると、メイン画面の下部にタスクバーが配置されます。</p> <p>MonitorAutoDetect — 接続されているモニター数を検出するかどうかを決めます。モニターが 1 つのみ接続されている場合は、スパンモードはミラーモードとして転送されます</p> <p>Swap — デュアルモニター使用時に Mainscreen=2 が設定してある場合、モニター表示を入れ替えます。</p>
***ShutdownInfo={ no , yes}	システムバージョン、端末名、IP アドレス、MAC アドレスなどの各種情報をシャットダウンウィンドウで表示するかどうかを yes/no で選択します。
**DeskColor="rrr ggg bbb"	デスクトップの背景色を RGB 文字列形式で指定します。引用符で囲んでください。rrr、ggg、bbb は 0~255 の 10 進数の数字です。wnos.ini ファイルで EnableLocal を yes に設定している場合に、wnos.ini ファイルで本パラメータを使用すると、本パラメータは NVRAM に保存されます。

パラメータ	説明
<pre>**Desktop=<bitmap file> [Layout={center, tile, stretch}] [IconTextColor="rrr ggg bbb"]</pre>	<p>Desktop — ローカルデスクトップの壁紙として使用するビットマップファイルを指定します。このファイルは、4ビット、8ビット、または24ビット BMP ファイル、もしくは標準 GIF ファイルまたは標準 JPEG ファイルを指定できます。このファイルは、FTP サーバーの wnos\bitmap ディレクトリに置く必要があります。デフォルトは Wyse wallpaper です。パラメータを無効にするには、値を空白のままにします (Desktop=wysedefault)。</p> <p>Layout — デフォルトは stretch です。Desktop パラメータで指定したビットマップファイルのデスクトップの背景における配置を指定します。自動ダイアルアップを設定している場合、Layout は無効になります。center を設定すると、画像はサイズを変更せずにデスクトップの中央に配置されます。tile を設定すると、画像がデスクトップ全体に複製されます。stretch を設定すると、画像がデスクトップのサイズに合わせて変更されます。</p> <p>注:デュアルモニターモードでは、壁紙が複製され、2つのモニターで共有されるのではなく、モニターごとに別々に指定されます。</p> <p>IconTextColor — アイコンテキストの色を RGB 文字列形式で指定します (引用符で囲んでください)。rrr、ggg、bbb は 0~255 の 10 進数の数字です。</p>
<pre>**ScreenSaver={0, 1, 5, 10, 15, 30} [LockTerminal={0, 1, 2}] [Type={0,1, 2}] [Image=<imagefile>]</pre>	<p>ScreenSaver — 何も操作が行われない時間が制限時間(開始前の遅延)に達した場合にシンクライアントのスクリーンセーバーを起動するように設定します。スクリーンセーバーを起動するまで時間と遅延は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> 0 — 無効 1 — 1 分 5 — 5 分 10 — 10 分(デフォルト) 15 — 15 分 30 — 30 分 <p>LockTerminal — スクリーンセーバーがアクティブな状態になった場合に使用するシンクライアントの LOCK 状態機能を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 0 — 無効(デフォルト) 1 — スクリーンセーバーがアクティブな状態になった場合、シンクライアントを LOCK 状態にします。 <p>サインオンパスワードを入力してシンクライアントのロックを解除するためのロック解除ダイアログボックスが、ユーザーに対して表示されます。wnos.ini ファイルで LockTerminal=1 および EnableLocal=yes が設定されている場合は、LockTerminal 設定が NVRAM に保存されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 2 — スクリーンセーバーがアクティブになった時点でシンクライアントを LOCK 状態にします。ただし、ロック解除ダイアログボックスを表示できず、デスクトップは空白画面をスクリーンセーバーとして使用します。 <p>注:Lock 動作を有効にするには、パスワードを使用してサインオンする必要があります。</p> <p>注:KeySequence で設定しておけば、Ctrl+Alt+左矢印または Ctrl+Alt+右矢印を押していつでもシンクライアントをロックできます。</p> <p>Type — 使用するスクリーンセーバーの種類を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> 0 — 空白画面 1 — フライングバブル 2 — ムービングイメージ <p>Image — ホームフォルダ内のサブフォルダビットマップに含まれる画像ファイルをスクリーンセーバーのムービングイメージとして使用するよう指定します。</p> <p>注:Type=2 で画像ファイルが指定されていない場合は、デフォルトの Wyse ロゴ画像が使用されます。</p>

パラメータ	説明
*Screen={ <u>1</u> , 2}	<p>デフォルトは 1 です。</p> <p>Screen — Resolution パラメータのモニターを指定します。各モニターをそれぞれの解像度で設定できます。Screen=オプションで特定のモニターを設定してください。</p> <p>重要: Screen パラメータは、Resolution パラメータの前に以下のように記述してください。</p> <p>screen=1 resolution=1280x1024 refresh=60 rotate=none</p>
*Resolution={ <u>DDC</u> , 640X480, 800X600, 1024X768, 1152X864, 1280X720, 1280X768, 1280X1024, 1360X768, 1366X768, 1368X768, 1400X1050, 1440X900, 1600X900, 1600X1200, 1680X1050, 1920X1080, 1920X1200} [Refresh={ <u>60</u> , <u>75</u> , 85}] [rotate={ <u>none</u> , right}]	<p>デフォルトは DDC です。</p> <p>Resolution — ローカルディスプレイの解像度を指定します。DDC オプションは、デフォルトディスプレイの解像度を選択するために指定できます。</p> <p>重要: Wyse の Y ケーブルを使用する場合、デフォルトで DDC は両方のモニターで正常に機能します。ただし、R10L/R00x クライアントに接続して Dual DVI を使用している場合に、DDC を両方のモニターで正常に機能させるには、以下の DualHead INI パラメータと DualHead オプションを追加する必要があります。</p> <p>パラメータ: DualHead=yes オプション: ManualOverride=yes</p> <p>Refresh — ローカルディスプレイの更新速度を指定します</p> <p>注: Resolution または Refresh パラメータ値を変更した場合は、シンクライアントはユーザーへの通知なしにリポートされます。</p> <p>rotate — Rotate では、モニターを回転させてポートレートモードで表示させることができます。</p> <p>例: screen=1 resolution=1280x1024 refresh=60 rotate=none</p> <p>重要: Screen パラメータは、Resolution パラメータの前に以下のように記述してください。</p> <p>screen=1 resolution=1280x1024 refresh=60 rotate=none</p>

5.14 TCX と HDX

パラメータ	説明
***MMRCodecConfig=AUDIO [disableac3={ no , yes}] [disablempeg={ no , yes}] [disablewma1={ no , yes}] [disablewma2={ no , yes}] [disablewma3={ no , yes}] [disablemp3={ no , yes}] [disablepcm={ no , yes}]	MMRCodecConfig (Wyse TCX Multimedia) — オーディオ再生時に各種コーデックオプションの無効化を許可するオーディオを指定します。 disableac3 — デフォルトは no です。オーディオ再生時に ac3 コーデックを無効にするかどうかを yes/no で選択します。 disablempeg — デフォルトは no です。オーディオ再生時に mpeg コーデックを無効にするかどうかを yes/no で選択します。 disablewma1 — デフォルトは no です。オーディオ再生時に wma1 コーデックを無効にするかどうかを yes/no で選択します。 disablewma2 — デフォルトは no です。オーディオ再生時に wma2 コーデックを無効にするかどうかを yes/no で選択します。 disablewma3 — デフォルトは no です。オーディオ再生時に wma3 コーデックを無効にするかどうかを yes/no で選択します。 disablemp3 — デフォルトは no です。オーディオ再生時に mp3 コーデックを無効にするかどうかを yes/no で選択します。 disablepcm — デフォルトは no です。オーディオ再生時に pcm コーデックを無効にするかどうかを yes/no で選択します。
***MMRCodecConfig=VIDEO [disablempeg1={ no , yes}] [disablempeg2={no, yes }] [disablejpeg={ no , yes}] [disablewmv1={ no , yes}] [disablewmv2={ no , yes}] [disablewmv3={ no , yes}]	MMRCodecConfig (Wyse TCX Multimedia) — ビデオ再生時に各種コーデックオプションの無効化を許可するビデオを指定します。 disablempeg1 — デフォルトは no です。ビデオ再生時に mpeg1 コーデックを無効にするかどうかを yes/no で選択します。 disablempeg2 — デフォルトは yes です。ビデオ再生時に mpeg2 コーデックを無効にするかどうかを yes/no で選択します。 disablejpeg — デフォルトは no です。ビデオ再生時に jpeg コーデックを無効にするかどうかを yes/no で選択します。 disablewmv1 — デフォルトは no です。ビデオ再生時に wmv1 コーデックを無効にするかどうかを yes/no で選択します。 disablewmv2 — デフォルトは no です。ビデオ再生時に wmv2 コーデックを無効にするかどうかを yes/no で選択します。 disablewmv3 — デフォルトは no です。ビデオ再生時に wmv3 コーデックを無効にするかどうかを yes/no で選択します。
***Device=vusb [ForceRedirect=<DeviceID>] [ForceLocal=<DeviceID>] [Type={TCX, HDX}] [InterfaceRedirect={ no , yes}]	Device — デフォルトではリダイレクトされないローカル USB デバイスの ID を指定します。 ForceRedirect — ローカル USB デバイスのサーバーへの強制リダイレクトを指定します。本パラメータは ForceLocal よりも優先されます。 ForceLocal — ローカル USB デバイスをサーバーにリダイレクトしないように設定します。 DeviceID はイベントログにあります。たとえば、「TCX USB: Local Device (0x04f2,0x0112,0x03,0x01,0x01)」がある場合は、以下のようにパラメータを設定します。 Device=vusb ForceRedirect=0x04f2,0x0112,0x03,0x01,0x01 Type — (ICA のみ) ICA 環境で、USB の仮想化に TCX ではなく HDX を強制的に使用できるようにします。 例: Device=vusb Type=HDX 注: TCX オプションを使用するには、TCX Suite がターゲットサーバーにインストールされていなければなりません。 InterfaceRedirect — 複合デバイス的一方をローカル、一方をリモートセッションで使用するために有効化します。

5.15 日付と時刻

パラメータ	説明
TimeServer=<server_list> [TimeFormat={" 24-hour format ", "12-hour format"}] [DateFormat={<yyyy/mm/dd>, <mm/dd/yyyy>, <dd/mm/yyyy>}]	TimeServer — 日付時刻設定にSNTP時間サーバーを使用するように設定します。時間サーバーが定義されていない場合は、クライアントの内部時計が基準として使用されます TimeFormat — デフォルトは「24 時間形式」です。使用する時間形式を指定します。 DateFormat — デフォルトは yyyy/mm/dd です。使用する日付形式を指定します。 注: wnos.ini ファイルで EnableLocal=yes を設定している場合、wnos.ini ファイルの TimeFormat および DateFormat 設定は、NVRAM に保存されます。 例: TimeServer=time.nist.com TimeFormat="24-hour format" DateFormat=mm/dd/yyyy または TimeServer=time.nist.com ¥ TimeFormat="24-hour format" ¥ DateFormat=mm/dd/yyyy TimeZone — シンクライアントで時間帯が未指定の場合や、ManualOverride を使用する場合に、時間帯を指定します。設定可能な時間帯は、「システム設定」ダイアログボックスに一覧表示されます ([GMT - 12:00]、1 時間プラスの [GMT + 13:00]、[GMT + 03:30]、[GMT + 04:30]、[GMT + 05:30]、[GMT + 05:45]、[GMT + 06:30]、[GMT + 09:30]、[GMT - 3:30]、[Greenwich Mean Time]など)。TimeZone パラメータは、TimeServer=パラメータの設定によって異なります。時間サーバーを定義していない場合は、クライアントの内部時計が基準として使用されます。 ManualOverride — デフォルトは no です。この TimeZone 設定でシンクライアントの[システム設定]メニュー設定を上書きするかどうかを yes/no で選択します。wnos.ini ファイルで EnableLocal=yes を設定している場合、wnos.ini ファイルの TimeZone 設定が NVRAM に保存されます。 Daylight — デフォルトは no です。サマータイムを有効にするかどうかを yes/no で選択します。mmwwdd は、サマータイムの開始と終了を指定する 6 桁の数字です。 Mm - 01~12 は、1 月~12 月を示します。たとえば、01 は 1 月です。
TimeZone=<zone> [ManualOverride={no, yes}] [daylight={no, yes}] [start=<mmwwdd> end=<mmwwdd>] [TimeZoneName=<timezonename>] [DayLightName=<daylightname>]	Ww - 01~04 は月の第何週目かを示し、05 は最終週を示します。たとえば、01 は第 1 週です。 Dd - 01~07 は月曜日~金曜日を示します。たとえば、01 は月曜日です。 TimeZoneName — ICA/RDP セッションに送信される表示名です (Eastern Standard Time など)。 DayLightName — サマータイムの表示名です。サマータイムが有効な場合、DayLightName は Eastern Daylight Time といった名前になります。サマータイムが無効な場合は、TimeZoneName と同じです。 例: TimeZone="GMT - 08:00" Daylight=Yes Start=030107 End=110107 TimeZoneName="Pacific Standard Time" DayLightName="Pacific Daylight Time"

5.16 ネットワーク

パラメータ	説明
BootpDisable={ <u>no</u> , yes}	デフォルトは no です。 BootpDisable — BOOTP 要求を無効にするかどうかを yes/no で選択します。US100d では、DHCP と BOOTP の両方でネットワーク設定を取得できます。最初の 2 回は、DHCP のみが要求されます。次に、DHCP と BOOTP の両方が要求されます。BOOTP 要求により、DHCP サーバーからの IP の取得が遅れる環境もあります。BootpDisable=yes を設定すると、DHCP 要求のみが実行されます。この設定は、次のリブート後はじめて有効になります。
DHCPExpire={ <u>reboot</u> , shutdown}	デフォルトは reboot です。 DHCP リースの有効期限が切れると、「DHCP Expired, you must reboot.」というメッセージがユーザーに通知されます。 reboot — 5 秒後、システムがリブートされます。 shutdown — 5 秒後、システムがシャットダウンされます。
TcpTimeOut={ <u>1</u> , 2}	デフォルトは 1 です。 TCP 接続のタイムアウト値を指定します。TCP 接続のタイムアウト値を示す 30 秒単位の数字です。この値は 1 または 2 とします。接続タイムアウト値は 1x30= 30 秒から 2x30= 60 秒までとなります。 3~255 の値は、下位互換性を確保するためにのみ認識されます (>2 = 60 秒)、ただし、これらの値はなるべく使用せずに、2 を設定することをお勧めします。
TcpMaxRetransmission={2-12}	TCP 接続の再送信回数を指定します。デフォルト値は 5 です。
Community=<Communityname>	SNMP コミュニティ名を指定します。最大 31 文字の文字列で指定します。 本設定は、不揮発性メモリに保存されます。
***HidelP={ <u>no</u> , yes}	デフォルトは no です。 接続ホストまたは IP の情報を非表示にするかどうかを yes/no で選択します。 例: - デスクトップの接続アイコンにマウスカーソルを移動すると、バルーンヘルプポップアップにホスト名ではなく「...」が表示されます。 - 「Reconnect to a connection」メッセージまたは ICA エラーメッセージウィンドウが表示される場合、ホスト名ではなく接続の説明が表示されます。 - PN アイコンにマウスカーソルを移動しても、接続されている PN サーバーは表示されません。
***IPProto=ICMP [DisableTStamp={yes, no}] [DisableEcho={yes, no}]	ICMP プロトコルを設定します。 DisableTStamp — DisableTStamp=yes の場合、システムは ICMP タイムスタンプ(13) 要求を反映しません。 DisableEcho — DisableEcho=yes の場合、システムは ICMP エコー(8) 要求を反映しません。この場合、相手に ping を打つことはできません。
*EthernetSpeed={" <u>Auto</u> ", "10M HD", "10M FD", "100M HD", or "100M FD", "1000M"}	デフォルトは auto です。 EthernetSpeed — EthernetSpeed を "Auto", "10M HD", "10M FD", "100M HD", "100M FD", "1000M" のいずれかに指定します。本設定は不揮発性メモリに保存されます。本パラメータの代わりに、Device= Ethernet パラメータを使用することもできます。 注: EthernetSpeed パラメータ値を変更した場合は、シンクライアントをリブートする必要があります。

パラメータ	説明
<pre>*Device=Ethernet [Speed={"Auto", "10M HD", "10M FD", "100M HD", or "100M FD", "1000M"}] [MTU=mtu] [KeepAlive={1-600}] [Warning={no, yes}] [StaticIPWaitFileServer={0-255}]</pre>	<p>Device — イーサネットの使用を指定します。</p> <p>Speed — デフォルトは auto です。"Auto"、"10M HD"、"10M FD"、"100M HD"、"100M FD"または"1000M"のいずれかにイーサネット速度を指定します。</p> <p>注: EthernetSpeed パラメータは、Device= Ethernet パラメータの代わりに使用します。</p> <p>MTU — 500~1500 の最大転送単位の値です。</p> <p>KeepAlive — アイドル接続をアライブ状態で維持する時間値を指定します(1~600 の秒単位)。</p> <p>Warning — デフォルトは no です。アイドル接続について警告するかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>指定した KeepAlive の秒が経過しても TCP 接続がアイドル状態で Warning=yes の場合は、そのセッションについてのログが 1 つ出力されます。例: device=ethernet keepalive=20 warning=yes</p> <p>StaticIPWaitFileServer — デフォルトは 0 ですが、静的 IP アドレスの場合に秒単位でタイムアウトしきい値を指定します。デフォルトは 0 です。その場合パラメータは無効になり、システムはデフォルト 120 秒で待機するようになりますので注意してください。</p> <p>注: Device=Ethernet パラメータの値を変更した場合は、シンクライアントをリポートする必要があります。</p>

5.17 無線 LAN/802.1X


パラメータ	説明
<pre> ***Device=Wireless [Mode={Infrastructure, AdHoc}] [SSID=<ssid>] [Channel={1-14}] [WepKey={None, 1-4}] [Key1=<k1>] [Key2=<k2>] [Key3=<k3>] [Key4=<k4>] [Key1Enc=<key1 encrypted>] [Key2Enc=<key2 encrypted>] [Key3Enc=<key3 encrypted>] [Key4Enc=<key4 encrypted>] [RoamSensitive={high, medium, low}] [Algorithm={Open, SharedKey}] [DisableBand={None, 24G, 5G}] [Priority=ssid_list] </pre>	<p>Device — ワイヤレスイーサネットデバイスをリモートで定義し、ローカル NVRAM に保存します。一部のオプションは不要です。たとえば、Key1 の値としてキー「k1」を定義し、Key2～Key4 は設定しないことも可能です。 注:「IEEE8021X={yes, no}」も参照してください。</p> <p>一般的な例: device=wireless SSID=THINOS RoamSensitive=low k1～k4 は、5～13 文字の現実の値か、10～26 の 16 進数です。 暗号化された鍵は、暗号化されていない鍵を上書きします。Key1 と Key1Enc の両方を設定すると、Key1 が Key1Enc で上書きされます。</p> <p>RoamSensitive — ローミングデーモンの開始についてワイヤレスローミングの感度レベルを定義します。 high - -60dBm 未満の信号 medium - -70dBm 未満の信号 low - -80dBm 未満の信号</p> <p>ワイヤレスローミングを有効にするには、RoamSensitive パラメータも使用します。本パラメータを INI ファイルで設定していない場合、信号が -80dbm 未満でも、ワイヤレス信号が完全に失われない限りローミングは開始されません。</p> <p>Algorithm — US100d とアクセスポイント間の WEP の認証方法を指定します。Open を設定すると、オープン認証が選択されます。ShareKey を設定すると、共有鍵認証が選択されます。</p> <p>DisableBand — デフォルトは None (帯域幅を無効にしない) です。2.4G または 5G 802.11 帯域幅を無効にするために使用します。</p> <p>Priority — ワイヤレスプロファイルの優先順位を設定します。SSID のリストは、セミコロンまたはコンマで区切られ、優先度は、記載順に高から低になります。</p>

パラメータ	説明
<pre> ***IEEE8021X={yes, no} [network={wired, wireless}] [Profile=<ssid>] [access={None, WPA-PSK, WPA2-PSK, WPA-ENT, WPA2-ENT}] [eap={yes,no}] [eaptype={None, EAP-LEAP, EAP-TLS, EAP-PEAP}] [leapun=<username for EAP-LEAP>] [leappwd=<password for EAP-LEAP>] [leappwdEnc=<password encrypted for EAP-LEAP>] [tsauthtype={user, machine}] [tslntcert=<client certificate filename for EAP-TLS>] [tslntprikey=<filename of certificate with private key for EAP-TLS>] [tslntprikeypwd=<password for private Key>] [tslntprikeypwdEnc={password encrypted for private key}] [peapeap={EAP-MSCHAPV2, EAP-GTC}] [peapidentity=<identity/username for PEAP>] [peapmschapun=<username for EAP-PEAP/EAP-MSCHAPV2>] [peapmschappwd={password for EAP-PEAP/EAP-MSCHAPV2}] [peapmschappwdEnc=<password encrypted for EAP-PEAP/EAP-MSCHAPV2>] [peapmschapdm=<domain for EAP-PEAP/ EAP-MSCHAPV2>] [peapmschaphidedm={yes,no}] [peapsinglesignon={yes, no}] [peapgtcun=<username for EAP-PEAP/ EAP-GTC>] [peapgtcpwd=<password for EAP-PEAP/ EAP-GTC>] [peapgtcpwdEnc=<password for encrypted for EAP-PEAP/EAP-GTC>] [wpapskpwd=<passphrase for WPA-PSK>] [wpapskpwdEnc=<passphrase encrypted for WPA-PSK>] [wpa2pskpwd=<passphrase for WPA2-PSK>] [wpa2pskpwdEnc=<passphrase encrypted for WPA2-PSK>] [encryption={TKIP CCMP}] </pre>	<p>IEEE8021X を使用するかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>重要: IEEE8021X のユーザー名 (peapmschapun, leapgtcun, leapun) は、例えば \$MAC、\$SN などのシステム変数を設定することができます。</p> <p>注: 「Device=Wireless」も参照してください。</p> <p>注: eaptype=EAP-LEAP は動作保障対象外です。</p> <p>一般的な例:</p> <pre> device=wireless SSID=THINOS RoamSensitive=low IEEE8021X=yes network=wireless access=wpa2-ent eap=yes eaptype=eap-tls tslntcert=wyselulin.cer tslntprikey=wyselulin.pfx tslntprikeypwd=123456 tslntprikeypwdenc=DCFIE003FX tslntauthtype=machine encryption=CCMP </pre> <p>一般的なルール:</p> <ol style="list-style-type: none"> IEEE8021X を no に設定すると、それ以降のパラメータはすべて無視されます。 ネットワークを設定していない場合は、設定が無視されます。 等号の左側のキーでは大文字と小文字が区別されます。等号の右側の値では、ユーザー名、パスワード、証明書ファイル名などの認証情報を除き、大文字と小文字は区別されません。 有線接続用と無線接続用の二つが INI ファイルに設定されている場合、両方とも有効になります。 <p>例:</p> <pre> IEEE8021X=yes network=wired access=None ... IEEE8021X=yes network=wireless access=WPA-ENT ... </pre> <ol style="list-style-type: none"> network を wired に設定すると、一部のパラメータはデフォルト値に設定されます。例: access=None, wpapskpwd={ignored} eaptype 設定にかかわらず、EAP 認証情報はすべて格納されます。 下線が引いてある値は、デフォルトです。 暗号化されていないパスワードは、暗号化されたパスワードで上書きされます。暗号化されたパスワードと暗号化されていないパスワードを設定すると、暗号化されたパスワードが暗号化されていないパスワードに上書きされます。 <p>例:</p> <pre> IEEE8021X=yes network=wireless access=wpa-ent eap=yes eaptype=eap-tls tslntcert=user.cer tslntprikey=user.pfx tslntprikeypwd=12345678 IEEE8021X=yes network=wireless access=wpa-ent eap=yes eaptype=eap-tls tslntcert=user.cer tslntprikey=user.pfx tslntprikeypwd=12345678 leapun=user1 password=1234 peapmschapun=user1 peapmschappwd=12345 peapmschapdm=wyse.com </pre> <p>Profile 設定する SSID 認証を指定します (SSID は、ワイヤレスネットワークの公開名)。複数の ssid ワイヤレス設定がサポートされている場合は、「ieee8021x」文を「device=wireless」文の後に記述します。また、設定する ssid 認証を識別するための「profile」パラメータがもう一つ必要になります。</p> <p>例:</p> <pre> #ThinIsIn Device=Wireless Mode=Infrastructure SSID=ThinIsIn IEEE8021X=yes network=wireless profile=ThinIsIn access=WPA2-ENT eap=yes eaptype=EAP-PEAP peapeap=EAP-MSCHAPV2 peapmschapdm=wyse #wtos_95 Device=Wireless Mode=Infrastructure SSID=wtos_95 IEEE8021X=yes network=wireless profile=wtos_95 access=WPA2-ENT eap=yes eaptype=EAP-PEAP peapeap=EAP-MSCHAPV2 </pre>

5.18 サインオン

パラメータ	説明
SignOn={ yes , no, NTLM} [MaxConnect=<max count>] [ConnectionManager={maximize, minimize , hide}] [EnableOK={ no , yes}] [DisableGuest={ no , yes}] [DisablePassword={ no , yes}] [LastUserName={ no , yes}] [RequireSmartCard={ no , yes}] [SCRemovalBehavior= {-1, 0 , 1}] [SaveLastDomainUser={yes, no, user, domain}] [DefaultINI=<filename>] [IconGroupStyle={ default , folder}] [IconGroupLayout={ Vertical , Horizontal}] [PasswordVariables={yes, no }] [ExpireTime={ 0 , 1-480}] [SCShowCNName={ yes ,no}] [SCSecurePINEntry={ no , yes}]	<p>デフォルトは yes です。</p> <p>サインオンプロセスを有効にするかどうかを yes/no/NTLM で選択します。NTLM を設定すると、ユーザーを NTLM プロトコルで認証できます。ユーザーはドメインユーザーにする必要があります。ftp://~/wnos/ini/ ディレクトリで同じサインオンユーザー認証情報を利用する必要があります。NTLM プロトコルでも WINS サーバーは必要です。</p> <p>MaxConnect — wnos.ini ファイルと {username}.ini ファイルで指定できる最大接続回数の合計です。MaxConnect の範囲は 100~1000 です。デフォルトの最大回数は 216 回です。</p> <p>ConnectionManager — デフォルトは minimize です。サインオン時の接続マネージャーの状態です。 注: 接続マネージャーはクラシックデスクトップモード (SysMode=classic)のみ使用されます。</p> <p>EnableOK — デフォルトは no です。「Sign-on」ダイアログボックスに [OK] および [Cancel] コマンドボタンを表示するかどうかを yes/no で選択します。 注: 本パラメータはクラシックデスクトップモード (SysMode=classic)のみ有効になります。</p> <p>DisableGuest — デフォルトは no です。ゲストサインオンを無効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>DisablePassword — デフォルトは no です。ローカルログオンダイアログボックスにパスワードテキストボックスとパスワード確認ボックスを無効にするかどうかを yes/no で選択します。 注: 本パラメータはローカルログオンダイアログボックスとして動作時に有効になります。</p> <p>LastUserName — デフォルトは no です。ユーザーログオフ後、前回サインオンしたユーザー名を表示するかどうかを yes/no で選択します。 注: 本パラメータはローカルログオンダイアログボックスとして動作時に有効になります。</p> <p>RequireSmartCard — デフォルトは no です。スマートカードで強制的にログオンするかどうかを yes/no で選択します。 注: 本パラメータはローカルログオンダイアログボックスとして動作時には使用できません。US100d には PIN コードを読みこむユーティリティがないため、ユーザー PIN の入力が必要なデバイスではスマートカードログオンを強制してもローカルログオンできません。</p> <p>SCRemovalBehavior — デフォルトは 0 です。スマートカードを抜いたときの処理を指定します。 -1 — システムは動作を続行しますが、サーバーとさらに通信することはできず、端末ロックオプションはグレー表示されます。 0 — システムがログオフされます。 1 — システムがロックされます。ロックは、スマートカードで同じ証明書を使用した場合のみ解除できます。</p> <p>SaveLastDomainUser — サインオンに成功後、ユーザー名とドメインを NVRAM に保存するかどうかを yes/no で選択します。wnos.ini ファイルで DefaultUser を設定していない場合は、次回リブート時に、NVRAM に保存したユーザー名とドメインが、デフォルトのユーザー名とドメインとしてサインオンサーバーに表示されます。</p>

パラメータ	説明
	<p>ユーザー名/ドメインのサイズは 32 文字に限定されています。32 文字を超える場合は、切り詰めた後 NVRAM に保存されます。</p> <p>注:ブローカーサーバー接続ダイアログとして動作時に有効になります。ローカルログオンダイアログでは動作しません。</p> <p>DefaultINI — オプションの DefaultINI は、ユーザー名 ini ファイルのデフォルトフォルダ内にあるファイルの名前を設定します。 {username}.ini が見つからない場合は、このファイルがデフォルトとして読み込まれます。</p> <p>IconGroupStyle — オプションの IconGroupStyle は、デスクトップのアイコングループのスタイルを設定します。 IconGroupStyle=folder を設定すると、デスクトップで表示するように指定されている PNAgent 公開アプリケーションが、フォルダとともに表示されます。フォルダアイコンをクリックすると、このフォルダ内のサブフォルダまたはアプリケーションがデスクトップに表示されます。この場合、[Up to 1 Level]アイコンが一番上になります。このアイコンをクリックすると、1 つ上のレベルのフォルダに含まれる内容が表示されます。</p> <p>注:本パラメータを有効にするには公開 AP 側の設定を有効にする必要があります。</p> <p>例:公開 AP のプロパティ - [ショートカットの表示] - [クライアントアプリケーションフォルダ] - [クライアントのデスクトップにショートカットを追加する]を有効にします。</p> <p>IconGroupLayout — デスクトップ上のアイコンの表示レイアウトを設定します。クラシックデスクトップモードでのみ有効になります。デフォルト値 Vertical は垂直(縦並び)表示です。IconGroupLayout =Horizontalで水平(横並び)表示になります。</p> <p>PasswordVariables — デフォルトは no です。パスワードで変数マッピング(\$TN、\$UN など)を有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>注:本パラメータはローカルログオンダイアログ使用時には使用できません。ブローカーサーバー接続時に使用できます。サインオンダイアログで入力されたユーザー名、パスワードを変数に格納し、Connect=ICA/RDP のオプションパラメータにシステム変数を使用できます。</p> <p>ExpireTime — サインオンの有効時間を指定します。範囲は 0~480 分です。デフォルトは、有効時間なしを意味する「0」です。</p> <p>値が 480 より大きい場合は、代わりに 480 が設定されます。値が 0 より小さい場合は、代わりに 0 が設定されます。システムサインオンまたは接続開始後、有効時間のカウントが始まります。有効時間終了後に、アイコン、メニュー、または接続マネージャーをクリックして接続を開始すると、パスワードを入力するためのポップアップメッセージボックスが表示されます。パスワードが元のサインオンパスワードと同じであれば、セッションが開始されます。端末がロックされパスワードでロックが解除された場合は、サインオンの有効時間のカウントが改めて開始されません。</p> <p>SCShowCNName - デフォルトは yes です。スマートカードサインオンを使用する場合、このオプションは、ユーザー名として証明書の CN 名の使用を強制します。デフォルトでは、ユーザー名として UPN 名を使用します。</p> <p>SCSecurePINEntry - デフォルトは no です。このオプションは、Cherry キーボードで pkcs15 スマートカー</p>

パラメータ	説明
<p>ConnectionBroker={default, Microsoft, Quest, VMware} [IgnoreProfile={no, yes}] [SecurityMode={None,Warning,Full}] [EnableVWGateway]={yes, no} [VWGateway]=<url></p>	<p>ドのセキュア PIN 入力機能を有効にします。</p> <p>デフォルトは default です。</p> <p>使用する VDI ブローカーの種類を指定します。デフォルトはサードパーティーの VDI ブローカーで、VMware は VMware VDI ブローカーです。</p> <p>IgnoreProfile — デフォルトは no です。VDI ブローカーからのグローバル設定の構文解析を無効にするには、「IgnoreProfile=yes」を設定します。</p> <p>ConnectionBroker=default の場合のみ有効です。</p> <p>SecurityMode — SecurityMode は、VMware ブローカーのセキュリティモードを指定します。以下のように ConnectionBroker= VMware の場合のみ有効です。</p> <p>View Client においてサーバーの証明書を最高のセキュリティモードで検証するには、SecurityMode=Full を設定します。妥当性チェックエラーが発生した場合は、サーバーへの接続が失敗します。</p> <p>「Full」検証が不合格となる以下に示す 2 つの特別な例外において View Client で接続の続行を許可するには、SecurityMode=Warning を設定します。</p> <p>(1) 自己署名証明書の場合。</p> <p>(2) 証明書に無効な時間が含まれる場合。</p> <p>View Client で証明書を検証せずに接続を許可する場合は、SecurityMode=None を設定します。</p> <p>接続ブローカーの種類を指定します。VDM XML サポートを有効にする場合は、VMware を選択します。VMware を入力すると、ログイン画面に VMware ロゴが表示されません。</p>  <p>ヒント: Dell vWorkspace ブローカーの場合は、ConnectionBroker=Quest を推奨します。</p> <p>EnableVWGateway と VWGateway は vWorkspace は、ゲートウェイを設定するために使用されます。</p>
<p>PnLiteServer=List of {<IP address>,<DNS names>, or <URLs>} [ReconnectAtLogon={0, 1, 2}] [ReconnectFromButton={0, 1, 2}] [AutoConnectList=(*/*appname1;appname2;appname3...)] [timeout=5...300] [CAGRSAAuthMethod={LDAP, RSA}] [CAGAuthMethod={LDAP, RSA}] [CAGAuthMethod={LDAP+RSA, RSA+LDAP}] [RequestIconDataCount={0-65535}] [DefaultSettings={XenApp, XenDesktop}] [SmartcardPassthrough={yes, no}] [StoreFront={no, yes}]</p>	<p>PnLiteServer — オプションの TCP ポート番号や PNAgent/PNLite サーバーの URL を含む、IP アドレスまたはホスト名のリストを指定します。(デフォルトでは空のリストが指定されています)。</p> <p>任意指定のポートを含む各項目は、「<名前または IP>:port」の形で指定します。「:port」の指定は任意です。未指定の場合は、ポート 80 がデフォルトとして使用されます。ポート 80 以外のポートを使用する場合は、「IP:port」または「name:port」の形式でサーバーの場所とともにポート番号を明示的に指定する必要があります。本設定は不揮発性メモリに保存されます。</p> <p>PNAgentServer 文と Citrix MetaFrame Server の Web インタフェースは、この文と同じです。</p> <p>注: PNAgent/PNLite サーバーのリストと関連するドメインのリストは、オプションで DHCP サーバーオプション 181 と 182 にそれぞれ入力できます。</p> <p>注: Multifarm=yes の場合は、#でフェイルオーバーサーバーを区切り、コンマ(,)またはセミコロン(;)で異なるファームに属するサーバーを区切ります。</p> <p>注: StoreFront=yes で StoreFront サーバーへ接続する場合、PnLiteServer パラメータの URL に任意ポートを指定すると、StoreFront サーバーの認証に失敗します。この場合は StoreFront サーバーのレガシーサイトを有効にして、デフォルトストアを指定します。PnLiteServer パラメータには「http(s)://<Server FQDN>:port」の形式で URL 指定することで接続可能です。しかし、Store サービ</p>

パラメータ	説明
	<p>スサイトでなくレガシーサイトに接続することに注意が必要です。</p> <p>ReconnectAtLogon - ログオン時の再接続機能を指定します。 0 - オプションを無効にします(デフォルト)。 1 - 切断されたセッションにのみ再接続します。 2 - アクティブなセッションと切断されたセッションに再接続します。</p> <p>ReconnectFromButton - 再接続コマンドボタンで実行する再接続の機能を指定します。 0 - オプションを無効にします(デフォルト)。 1 - 切断されたセッションにのみ再接続します。 2 - アクティブなセッションと切断されたセッションに再接続します。</p> <p>AutoConnectList - PNA でサインオンする場合に自動的に起動する PNA アプリケーションを指定します。 「AutoConnectList=*」の場合は、すべての PNA アプリケーションが自動的に接続されます。</p> <p>Timeout - クライアントが接続確立を試みて接続不可を通知するまでの時間(秒単位)を指定します。</p> <p>CAGRSAAuthMethod、CAGAuthMethod - CAGAuthMethod オプションは CAG 認証の設定に使用します。</p> <p>注: 本オプションは、CAGRSAAuthMethod の代替として使用されます。CAGAuthMethod=RSA(以前の「CAGRSAAuthMethod=RSA Securid」と同じ)の場合は、ユーザー名、パスワード、ドメイン以外のパスワードフィールドに入力する必要があります。 CAGAuthMethod=LDAP の場合、パスワードフィールドは必要ありません。</p> <p>CAGAuthMethod={LDAP + RSA は、RSA+ LDAP} - CAG 認証設定に使用されます。 CAGAuthMethod=LDAP + RSA の場合、余分なパスワードフィールドには、ユーザー名/パスワード/ドメインを除いて入力する必要があります。</p> <p>CAG サーバーが二重認証ポリシー用に構成されている場合、INI ファイルは第一認証が LDAP、第二認証が RSA に対応しています。 CAGAuthMethod=RSA+ LDAP の場合は、CAGAuthMethod=RSA を使う場合と同じ結果になります。LDAP + RSA と比較すると、CAG サーバー構成の二重認証ポリシー場合、INI ファイルは第一認証が RSA、第二認証が LDAP に対応しています。</p> <p>RequestIconDataCount - RequestIconDataCount は、32 ビットカラーアイコンの要求に使用されます。これは、アイコンのカウントのみを要求するカウンタです。デフォルトの数字は 10 です。たとえば、RequestIconDataCount=0 を設定した場合、アイコンデータは要求されません。RequestIconDataCount=5 を設定した場合は、5 つのアイコンのみ要求されます。</p> <p>DefaultSettings - XenApp もしくは XenDesktop の既定の設定を US100d に適用します。</p> <p>Xen App の既定の設定:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. SignOn=Yes 2. PnliteServer= ¥ RequestIconDataCount=20 3. desktopcolordepth=32 4. LongApplicationName=yes 5. sessionconfig=ica ¥ progressivedisplay=yes ¥

パラメータ	説明
	<p> ondesktop=yes 6. device=audio ¥ volume=high 7. Seamless=yes ¥ FullscreenReserved=yes 8. sessionconfig=all ¥ mapdisks=yes 9. Enabled by default: Disks, Serials, Sound 10. Disabled by default: USB, Printers, Smart Cards Xen Desktop の既定設定: 1. SignOn=Yes 2. sysmode=vdi ¥ toolbarclick=yes ¥ toolbardelay=3 3. sessionconfig=ica ¥ progressivedisplay=yes 4. PnliteServer= 5. AutoSignoff=yes 6. Enable by default: Printers, Serials, USB, Sound 7. Disabled by default: Disk, Smart Cards SmartcardPassthrough - デフォルトは yes です。このオプションは、スマートカードパススルー認証の有効/無効を設定します。 StoreFront - デフォルトは no です。このオプションは、Citrix 社 StoreFront の認証をサポートします。値は NVRAM に保存されます。 </p>
VDIBroker=<vdi_broker_url> [AutoConnectList={* host1;host2;host3...}]	<p> VDIBroker — http と https の両方をサポートする VDI ブローカーサーバーを指定します。 vdi_broker_url の先頭が http または https でない場合、デフォルトでは http のプロトコルが使用されます。https 接続では、受け付けられる URL は 1 つのみです。 注: VDIBroker パラメータの値を変更した場合は、設定したサーバーに再接続するために、ユーザーへの通知なしにシンクライアントがリポートします。 AutoConnectList — VDI/VDM でサインオンする場合に自動的に起動する VDI/VDM ホストを指定します。値を「*」にすると、すべての VDI/VDM ホストが自動的に接続されます。 </p>
PasswordServer=<password_server> [AccountSelfService={yes, no}] [connect={ica, rdp}] [encryption={Basic, 40, 56, 128, Login-128, None}]	<p> PasswordServer — (ICA のみ) パスワードサーバーの IP アドレスを指定します。この IP アドレスは、Account Self Service サーバー (AccountSelfService=yes) または直接接続 (connect=) として定義できます。オプションが未指定の場合は、ICA プロトコルで接続されます。 AccountSelfService — パスワードサーバーを Account Self Service サーバーとして定義するかどうかを yes/no で選択します。AccountSelfService=yes の場合、ログオンダイアログボックスに Account Self Service アイコンも表示されます。PasswordServer パラメータの後に AccountSelfService=yes オプションが続く場合は、アカウントセルフサービスサーバーと接続オプションが無効になり、パスワードサーバーが指定されます。 AccountSelfService=yes を定義する場合は、Citrix Single Sign-On (Password Manager) が必要です。 AccountSelfService=no を設定する場合や AccountSelfService パラメータがない場合は、パスワードを変更するための直接的な ica または rdp 接続が確立されます。この場合、Citrix Single Sign-On (Password Manager) は必要ありません。 connect — パスワードのタイムアウトがある状態でユーザーサインオン用パスワードを修正するために ICA または RDP サーバーにログオンできる直接接続としてパス </p>

パラメータ	説明
	<p>ワードサーバーを定義します。この直接接続に暗号化オプションを設定することもできます。</p> <p>注: Citrix Single Sign-On(Password Manager)は動作保障対象外です。</p>
VirtualCenter=<virtual_center_url>	<p>http と https の両方をサポートする Virtual Center サーバーを指定します。virtual_center_url の先頭が http または https でない場合、デフォルトでは http のプロトコルが使用されます。</p> <p>注: 本パラメータは動作保障対象外です。</p> <p>注: INI ファイルの VirtualCenter が元の URL と異なる場合、新しい URL を有効にするためにシンクライアントがリブートします。</p> <p>注: 本設定でのみ Virtual Center 機能を有効にすることができます。</p>
SelectServerList={PNA, VDI}; list of servers {Server1; Server2; ...ServerN}	<p>ユーザーによるログオン時の PNA または VDI サーバーの選択を可能にします。</p> <p>PNA サーバーで使用する形式: description=server1_desc - host=server_host ... description=serverN_desc - host=serverN_host</p> <p>VDI サーバーで使用する形式: description=server1_desc - host=server_host ... description=serverN_desc - host=serverN_host</p> <p>注: 複数のサーバーは、コンマ「,」またはセミコロン「;」で区切ります。サーバーの説明、ホスト、およびその他のオプションはダッシュ「-」で区切ります。</p> <p>PNA サーバーオプションの場合は、PnLiteServer パラメータのオプションを使用してください。</p> <p>PNA の例: SelectServerList=PNA ; ServerDescription1 - 192.168.0.10 - autoconnectlist =* reconnectfrombutton=0; ServerDescription2 - HostName2.wyse.com - TimeOut=200; ServerDescription3 - https://server3.wyse.com;</p> <p>VDI サーバーの場合: VDM VDI ブローカーを使用する場合は、wnos.ini に ConnectionBroker=VMware を指定します。その他の場合、VDI ブローカーの種類はデフォルトです。</p> <p>VDI の例: ConnectionBroker=VMware SelectServerList=VDI ; description1 - 192.168.0.11; description2 - host2.wyse.com</p>
DisableDomain={no, yes}	<p>デフォルトは no です。</p> <p>「PNAgent/PNLite Sign-on」ダイアログボックスのドロップダウンメインリストを無効にするかどうかを yes/no で選択します。</p>
DomainList=<List of NT domain names>	<p>シンクライアントの「Sign-on」ダイアログボックスでオプションとして表示され、ユーザーが PNAgent/PNLite サーバーにサインオンするドメインを選択するために役立つドメイン名のリストです。本設定は、不揮発性メモリに保存されません。</p> <p>注: スペースが含まれる場合は、必ず引用符で囲ってください。</p> <p>例: DomainList="North_America, SQA, test-domain"</p>
SelectGroup={no, yes} [description=<group1>] [groupname=<name1>] [description=<group2>]	<p>デフォルトは no です。</p> <p>SelectGroup — ログオン時にユーザーがログオンダイアログボックスのグループリストからグループを選択できる</p>

パラメータ	説明
[groupname=<name2>]	<p>かどうかを yes/no で選択します。yes の場合は、グループリストボックスに説明が表示されます。</p> <p>groupname — ディレクトリとファイル名とともにグループ名を指定して、グループを識別します。未定義の場合は、説明がグループ名になります。</p> <p>例: SelectGroup=yes ¥ description="Dev team" groupname=dev ¥ description="Sus team" ¥ description="SQA team" groupname=sqa ¥ description="guest"</p> <p>例: Group1: Description="Dev team" groupname=dev ¥wnos¥ini¥dev¥dev.ini ファイルをファイルサーバーに作成する必要があります。dev.ini では、dev team のブローカー、ドメインリスト、または接続を定義できます。</p> <p>Group2: .Description="Sus team" ¥wnos¥ini¥Sus team¥Sus team.ini ファイルをファイルサーバーに作成する必要があります。</p> <p>Sus team.ini では、Sus team のブローカー、ブローカーリスト、または接続を定義できます。</p> <p>Group3...4...n...と続きます。</p> <p>ユーザーがグループを選択すると、システムはまずグループ ini ファイルを読み込み、次に ¥wnos¥ini¥{group_name}¥username.ini が読み込みます。</p> <p>グループディレクトリの username.ini が見つからない場合は、以前どおり ¥wnos¥ini¥username.ini を読み込もうとします。</p> <p>グループリストは複数のブローカーを定義する場合もあるので、SelectGroup=yes の場合、SelectServerList 文は無効になります。</p>
DefaultUser={<username>, \$SYS_VAR}	<p>デフォルトサインオンユーザーを指定します。</p> <p>\$SYS_VAR のシステム変数の一覧については、本書の「4 章(INI ファイルの作成規則と注意事項)」表 1 を参照してください。</p>
**Password=<Sign-On password> [encrypt={no, yes}]	<p>サインオンパスワードとしてパスワードを指定します。</p> <p>wnos.ini ファイルと{username}.ini ファイルで使用する方法が異なります。</p> <p>wnos.ini ファイル – ブローカーサーバーへサインオンするためのデフォルトパスワードとして扱われます。</p> <p>DefaultUser および DomainList が設定済みの場合は、入力を待たずに自動的にサインオンします。</p> <p>{username}.ini ファイル – wnos.ini ファイルに SignOn=yes が記載されており、さらにブローカーサーバーパラメータが指定されていない場合に表示される、ローカルログオンダイアログで資格認証に使用します。暗号化されたパスワードを設定する必要があります。この条件が満たされない場合、システムはサインオンに失敗します。許可されている場合は、「Sign-on」ダイアログボックスでユーザーがパスワードを変更することができます。</p> <p>注: ユーザーが「Sign-On」ダイアログボックスでパスワードが変更できない問題があります。</p> <p>encrypt — デフォルトは no です。平文テキストではなく INI ファイルでパスワードに暗号化された文字列を使用するかどうかを yes/no で選択します。encrypt=yes の場合、INI のパスワードは平文ではなく暗号化された文字列です。</p> <p>注: {username}.ini に記載する場合は、encrypt=no に設定しても平文テキストをパスワードに設定できません。</p>

パラメータ	説明
	例: Password=necetc@123 または Password=NCAONIBINMANMLCOLKCNLL ¥ encrypt=yes
MultiLogon={ <u>no</u> , yes}	デフォルトは no です。 このオプションは、複数のログオンをサポートします。 MultiLogon= yes で Citrix Xen サーバーにサインオンする場合、さまざまな Citrix Xen サーバーにサインオンしながら、認証ウィンドウに別のユーザー名、パスワード、およびドメインを入力できます。 下位互換性を維持するために、次の形式がサポートされています。 MultiLogon=yes PNAgentServer=10.1.1.30;10.2.2.60 SelectServerList ステートメントもサポートされています。 MultiLogon=yes SelectServerList=pna ¥ description=store host=http://proper-storefront-url.ctx.com description="Floor 3" host=10.1.1.30 ¥ description=""Floor 1" host=10.2.2.60 ¥ description="All Users" host=10.3.3.90 注: SelectServerList は PNAgentServer よりも優先されます。 ユーザーがどのようなサーバーにログオンしているが認識できるように、Citrix XenSever の説明または hostname 名前をサインオン画面に表示させることができます。 重要: SelectServerList={PNA、VDI}を参照してください。

5.19 認証サーバー

パラメータ	説明
OneSignServer=<OneSign_Server> [DisableBeep={no, yes} [KioskMode={no, yes}] [EnableFUS={no, yes}] [TapToLock={0, 1, 2}] [EnableWindowAuthentication={yes,no}] [AutoAccess={VMW,XD,XA}] [NetBIOSDomainName={no, yes}]	<p>注: OneSignServer パラメータは現時点ではサポートしておりません。使用する場合は、十分に事前検証を行い、問題がないことを確認してください。</p> <p>OneSignServer — Imprivata OneSign サーバーの任意の TCP ポート番号または URL をホスト名または IP アドレスのリストを指定します。https プロトコルを使用する必要があります。許容される入力値は次のとおりです。 https://<ip address>または https://<FQDN></p> <p>DisableBeep — デフォルトは no です。このオプションは、カードをタップしたときミュートに Rfideas リーダーを設定します。</p> <p>KioskMode — デフォルトは no です。このオプションは、OneSign ユーザーがクライアントデスクトップを共有できるようにします。</p> <p>EnableFUS — デフォルトは no です。このオプションは、スイッチのユーザーを実行しているままに Citrix クライアントを設定します。</p> <p>TapToLock — デフォルトは no です。このオプションは、スイッチのユーザーを実行しているままに Citrix クライアントを設定します。</p> <p>EnableWindowAuthentication — デフォルトは yes です。OneSign サインオンが失敗した場合は、ブローカーに事前定義されているサインオンユーザーの Windows 資格情報を使用します。</p> <p>AutoAccess — 自動的に起動するブローカー、対応するタイプを指定します。定義されていない場合には、ブローカータイプはコンピュータとユーザーポリシーの Imprivata サーバー設定から取得されます。それらのどれも定義されていない場合は、Imprivata サーバーから利用可能な最初のブローカーサーバーが起動します。</p> <p>注: AutoAccess は username.ini と wnos.ini で使用します。、しかし、wnos.ini の設定は username.ini より優先されます。</p> <p>NetBIOSDomainName — デフォルトは no です。このオプションは、NetBIOS ドメイン名を使用して、ブローカーサーバーへの認証を有効にします。yes に設定すると、Imprivata ドメインリストは、NetBIOS ドメイン名が表示され、カード使用者は、NetBIOS ドメイン名を使用して、ブローカーサーバーに認証します。</p>
SecureMatrixServer=<SecureMatrix Server Host name or IP address/FQDN or URL>	<p>ホスト名または IP アドレス/ FQDN または SecureMatrix サーバーの URL を指定します。HTTP または HTTPS プロトコルの使用は、サーバー構成によって決定されます。</p> <p>SecureMatrixServer が定義されている場合、ユーザーは最初に SecureMatrix サーバーとの認証を経由する必要があり、サーバーが正しいブローカー資格情報を提供することができれば、その後のブローカーへのシームレスなログオンが可能です。ブローカー資格情報を提供できない場合は、ログオンするためにブローカーの資格情報を入力する必要があります。</p>

5.20 VNC

パラメータ	説明
MaxVNCD={ <u>0</u> , 1} [VNCD_8bits={ <u>yes</u> , no}] [VNCD_Zlib={yes, <u>no</u> }]	<p>デフォルトは 0 です。</p> <p>VNC シャドウイングを有効にするオプションです。デフォルト値は 0 です (VNC シャドウイングが無効)。許可される VNC クライアントセッションは 1 つのみです。シャドウイングを有効にするには、1 を設定してください。</p> <p>VNCD_8bits — デフォルトは yes です。ピクセルあたり 8 ビットで VNC サーバーから画像を強制的に送信するかどうかを yes/no で選択します。no を設定した場合、VNC サーバーは現在のシステムカラー深度で画像を送信します。デフォルトは yes です。</p> <p>VNCD_Zlib — デフォルトは no です。VNC サーバーからの Zlib 圧縮によるデータ送信を許可するかどうかを yes/no で選択します。デフォルトは no です。</p>
VncPassword=<password> [encrypt={ <u>no</u> , yes}]	<p>VncPassword=password — シャドウイングに使用するパスワードとして、最大 16 バイトの文字列を指定します。</p> <p>encrypt — デフォルトは no です。使用している vncpassword を Base64 で暗号化するかどうかを設定する yes/no オプションです。</p> <p>重要: VNC Shadow を使用するには、パスワードを定義する必要があります。Base64 暗号化パスワードを使用している場合 (サードパーティーの Base64 エンコーダ/デコーダを使用できます) は、encrypt を yes に設定する必要があります (例: VncPassword=<Base64 encoded password> encrypt=yes)。平文パスワードを使用する場合は、encrypt を no に設定します (例: VncPassword=<plain text> encrypt=no)。</p>
**VNCPrompt={no, <u>yes</u> } [Accept, Reject]={ <u>10</u> -600} [ViewOnly={ <u>no</u> , yes}] [ActiveVisible={ <u>no</u> , yes}]	<p>デフォルトは yes です。</p> <p>VNCPrompt — ユーザーへの VNC シャドウイングプロンプトを有効にするかどうかを yes/no で選択します。VNCPrompt を yes に設定した場合、シャドウイング開始前に必ずユーザーにプロンプトが表示され、ユーザーが VNC シャドウイングを拒否するか受け付けるかを選択します。</p> <p>VNCPrompt を no に設定した場合、ユーザーがシャドウイングの拒否・受け付けを選択することはできません。</p> <p>Accept, Reject — デフォルトは 10 です。クライアントデスクトップをシャドウイング前にユーザーが VNC シャドウイングの拒否・受け付けを選択するまでの上限時間を指定します (秒単位)。</p> <p>ViewOnly — デフォルトは no です。シャドウイング中のデスクトップをシャドウイングしているユーザーのみに表示するかどうかを yes/no で選択します。キーボードまたはマウス操作によりシャドウイング中のシンクライアントが中断されることはありません。</p> <p>ActiveVisible — デフォルトは no です。VNC セッション終了後に VNC セッション終了通知を表示するかどうかを yes/no で選択します。</p>

5.21 WDM(Wyse Device Manager)

パラメータ	説明
WDMServer=<server_list> [Retry=<retry number value>]	WDMServer — WDM サーバーの IP アドレスまたは DNS 名(コンマ区切り)のリストを指定します。本設定は、不揮発性メモリに保存されます。 Retry — WDM サーバーへの接続の再試行回数を指定します。 注: Retry パラメータは動作しません。使用しないでください。
WDMService={yes, no} [DHCPinform={no, yes}] [DNSLookup={no, yes}]	デフォルトは yes です。 WDMService — WDM エージェントを無効にするかどうかを yes/no で選択します。WDM サーバーの検出は、以下の項目でサポートされています。 1. DNS ホスト名のルックアップ「wdmserver」 2. DNS SRV レコード「_wdmserver._tcp」 3. ベンダークラス「RTIAgent」の標準または WDM DHCP Proxy サービスから受信した DHCP オプションタグ値 DHCPinform — デフォルトは no です。DHCP 情報を使用するかどうかを yes/no で選択します。 DNSLookup — デフォルトは no です。DNSLookup を使用するかどうかを yes/no で選択します。 例: WDMService=yes の場合、DHCPinform=yes を設定すると上記 3 が設定されます。DNSLookup=yes を設定すると上記 1 と 2 が設定されます。
***CustomInfo={yes, no} [Custom1=<custom1_str>] [Custom2=<custom2_str>] [Custom3=<custom3_str>] [Location=<location_str>] [Contact=<contact_str>]	カスタム情報を設定/格納するかどうかを yes/no で選択します。 CustomInfo=yes の場合、以下のオプションで設定されているカスタム情報が NVRAM に格納されます。CustomInfo=no の場合、NVRAM 内のカスタム情報はクリアされます。 例: CustomInfo=yes custom1=11 custom2=2 custom3=3 location=wyse contact=peter

5.22 CCM(Cloud Client Manager)

パラメータ	説明
CCMEable={yes, no } [CCMServer=<server_address>] [GroupPrefix=<prefix>] [GroupKey=<hashkey>] [MQTTServer=<mqtt_address>[:<mqtt_port>]] [AdvancedConfig={ no , yes}] [CCMDefault={ no , yes}] [Override={ no , yes}]	デフォルトは no です。 注:本パラメータは動作保障されません。 CCMEable — Cloud Client Manager Agent を有効にするかどうかを yes/no で選択します。 CCMServer — Cloud Client Manager サーバーの IP アドレスまたは URL アドレスを指定します。本設定は、不揮発性メモリに保存されません。 GroupPrefix、GroupKey — GroupPrefix および GroupKey オプションは、Cloud Client Manager サーバーのグループコードを構成します。本設定は、不揮発性メモリに保存されます。 MQTTServer — MQTT サーバーの IP アドレスまたは URL アドレスとコロン(:)の後に MQTT ポートを指定します。本設定は、不揮発性メモリに保存されます。 AdvancedConfig — デフォルトは no です。GUI で[Cloud Client Manager server]および[MQTT server]フィールドを有効にするかどうかを yes/no で選択します。AdvancedConfig=yes を指定すると、Cloud Client Manager UI の[Cloud Client Manager server]および[MQTT server]フィールドが有効になります。「** PRIVILEGE=[None, Low, High] [LockDown={no,yes}] [HideSysInfo={no,yes}] [HidePPP={no,yes}] [HidePN={no,yes}] [HideConnectionManager={no, yes}]」も参照してください。 CCMDefault — デフォルトは no です。ブートアップ時に Configure Cloud 管理ダイアログを表示するかどうかを yes/no で選択します。CCMDefault=yes を指定し CCMServer および GroupKey が両方 NULL の場合は、ブートアップ時に Configure Cloud 管理ダイアログが表示されます。デフォルトの Cloud Client Manager サーバーに接続する場合は、グループコードを入力してください。 Override — デフォルトは no です。INI ファイルから前 groupkey を上書きできるようにするには、このオプションを有効にします。

5.23 Thinprint

パラメータ	説明
ThinPrintEnable={no, yes } [Port=<port number>]	デフォルトは yes です。 ThinPrintEnable — ThinPrint クライアントを有効にするかどうかを yes/no で選択します。 port — ThinPrint クライアントの TCP ポートです。ポート番号のデフォルト値は、4000 です。ポート番号の値は、65535 未満とします。

5.24 名前解決

パラメータ	説明
SysName={ <u>client</u> , DNS}	<p>デフォルトは client です。</p> <p>システム名を指定します。DNSを設定した場合は、DNS サーバーからの逆引き DNS 名が WDM サーバーにチェックインされます。デフォルトでは、端末名がチェックインされます。</p> <p>注: SysName パラメータの使用は推奨されません。使用しないでください。</p>
WINSServer=<server_list>	<p>WINS サーバーアドレスを指定します。WINSServer は、最大リストサイズが 2 の「;」または「,」で区切られた IP リストです。</p>
DNSIPVersion={ipv4, ipv6} [DNSServer=<server_list>] [DNSDomain=<dns_domain_url>]	<p>DNS サーバーとドメインを指定します。デフォルトの IP バージョンは ipv4 です。</p> <p>DNSServer は「;」または「,」で区切った IP のリストで、このリストの最大サイズは 16 です。</p>
DNSTTL={0-3600}	<p>DNS 名キャッシュの TTL (Time to Live) を指定します。デフォルトは、DNS サーバー設定です。</p> <p>注: DNSTTL=0 の場合、接続の DNS ホスト名は常に DNS サーバーを照会して IP を取得します。</p>
RegisterWINS=yes	<p>シンクライアントを Microsoft WINS サーバーに強制的に登録します。</p>
TerminalName=<terminal name> [reboot={no, yes}]	<p>TerminalName — 15 文字の文字列からなるシンクライアントの名前です。また、\$ MAC、\$SN または \$IP などのシステム変数を設定することもできます。</p> <p>reboot — 端末名を変更したときにシンクライアントをリポートするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>注: 本パラメータは wnos.ini に記載しないでください。\$MAC.ini にのみ記載してください。</p>
Hosts=<hosts file name>	<p>Hosts — ホストのファイル名を指定します。このファイルには、ホスト名と IP アドレスを 1 つの行ごとに関連付ける単純なテキストファイルです。ファイル名の長さは 63 文字に制限されています。ファイルは、ファイルサーバーに配置する必要があり、wnos.ini で EnableCacheIni=yes に設定した場合にキャッシュすることができます。ホスト名を解決するとき、システム最初に Hosts ファイルを検索します。見つからない場合は、DNS、WINS を参照します。以下は Hosts ファイル内のフォーマットの例です。</p> <pre>10.151.122.1 gateway.ctx.com 10.151.122.123 myym.ctx.com</pre>

5.25 DHCP オプション

パラメータ	説明
DHCPOptionsRemap={ no , yes} [DisableOption12={ no , yes}] [FileServer={128-254}] [RootPath={}] [FtpUserName={128-254}] [FtpPassWord={128-254}] [WDMServer={128-254}] [WDMPort={128-254}] [PnliteServer={128-254}] [DomainList={128-254}] [VDIBroker={248-254}] [WDMSecurePort={128-254}] [WDMFQDN={128-254}]	デフォルトは no です。 DHCPOptionsRemap — デフォルト DHCP オプションの再マッピングを行う必要がある場合に使用します。以下のオプションを設定できるかどうかを指定します。 各オプションの値は、128～254とします。オプションの値は、オプションごとに変える必要があります(重複はできません)。本オプションは、シンクライアントのブート用に DHCP オプションタグを設定するために使用します。 注: DisableOption12 オプション(デフォルトは no)は、Option12 タグを受け付けるかどうかを設定します。デフォルトでは、DHCP オプション 12 が端末のホスト名とドメイン名を設定します。たとえば、オプション 12 の情報が terminalname.nec.com の場合、端末名は terminalname、ドメイン名は nec.com と設定されます。DisableOption 12 の設定が NVRAM の値と異なる場合、値を有効にするためにシステムが自動的にリポートされません。 注: WDMSecurePort は、WDM サーバーの指定 HTTPS ポートです。 WDMFQDN — WDM サーバーの FQDN(Fully Qualified Domain Name)を指定します。 WDMServer — WDM サーバーの IP アドレスを指定します。 WDMPort — WDM サーバーの使用するポートを指定します。 WDMSecurePort — WDM サーバーの使用するセキュアポート(HTTPS)を指定します。
DHCPUserClassID=<class_id> [ParseVendorInfo={no, yes }]	DHCPUserClassID — DHCP に使用する UserClassID を指定します。 ParseVendorInfo — デフォルトは yes です。US100d が DHCP オプション 43(ベンダー固有の情報)を解釈するかどうかを指定します。 ParseVendorInfo に no が設定されており DHCPVendorID も使用されている場合は、ParseVendorInfo=yes を設定し、シンクライアントを 2 回リブートする必要があります。文字列は最大 26 文字です。
DHCPVendorID=<vendor_id> [ParseVendorInfo={no, yes }]	DHCPVendorID — DHCP に使用する VendorID を指定します。 ParseVendorInfo — デフォルトは yes です。US100d が DHCP オプション 43(ベンダー固有の情報)を解釈するかどうかを指定します。 ParseVendorInfo に no が設定されており DHCPVendorID も使用されている場合は、ParseVendorInfo=yes を設定し、シンクライアントを 2 回リブートする必要があります。文字列は最大 26 文字です。

5.26 サービス

パラメータ	説明
Service={snmpd, thinprint, vncd, wdm, vda, <port number>} [disable={ no , yes}]	Service — 有効または無効にできるサービスを指定します(サービスによって構文は異なります)。 disable — デフォルトは no です。サービスを無効にするかどうかを yes/no で選択します。disable の後には Service パラメータを指定する必要があります。
Service=snmpd [disable={ no , yes}] [community=<snmp community>]	デフォルトは no です。 Service=snmpd disable — snmpd サービスを無効にするかどうかを yes/no で選択します。 community — 「Community」文と同じです。
Service=thinprint [disable={ no , yes}] [port=<port number>] [PkSize={0-64000}]	デフォルトは no です。 Service=thinprint disable — thinprint サービスを無効にするかどうかを yes/no で選択します。 port — 「ThinPrintEnable={no, yes} port=port number」文と同じです。 PkSize — ThinPrint サーバーとのネゴシエーションでサーバーに送信するデフォルトのケットサイズを指定します。ThinPrint 7.6 では 64000 で、それ以前のバージョンの ThinPrint では 32000 です。US100d は 64K のバッファしか割り当てないので、サーバーのデフォルトケットサイズが 64000 より大きい場合、この設定を設定してください。この設定を行わなかった場合は、印刷が失敗します。
Service=vncd [disable={ no , yes }]	デフォルトは yes です。 vncd サービスを無効にするかどうかを yes/no で選択します(「MaxVncd={0, 1}」と同じです)。
Service=wdm [disable={ no , yes}]	デフォルトは no です。 WDM サービスを無効にするかどうかを yes/no で選択します。 ※本パラメータは動作しません。使用しないでください。
Service=<port number > [disable={ no , yes}]	デフォルトは no です。 このポート番号のサービスを無効にするかどうかを yes/no で選択します。Wyse Device Manager (WDM) はグローバルプロファイル(wnos.ini ファイル)を読み込む前に常に起動されるので、80 ポートは例外です。 ※本パラメータは動作しません。使用しないでください。

5.27 印刷

パラメータ	説明
PrinterMap=<text file name or URL>	プリンタのマッピングを定義するためにインクルードするテキストファイル。ファイルの各行は、「プリンタID=プリンタドライバ名」という形式です。 例:HL-1240 Series=HP LaserJet
***Printer={ COM1 , COM2, LPT1, LPT2} [Name=<name>] [PrinterID=<windows_driver>] [Class=<class_name>] [Enabled={no, yes }] [EnableLPD={ no , yes}]	デフォルトは COM1 です。 Printer — 設定するローカルプリンタを指定します。 Name — このオプションは必須です。プリンタの名前を指定します PrinterID — 指定しなければ、デフォルトの Generic/Text Only が使用されます。 Class — TPAutoconnect の ThinPrint 印刷(クライアント側からプリンタをマッピングする ThinPrint テクノロジー)で使用します。ThinPrint サーバー側と同じテンプレートを使用するために、プリンタをグループ化できます。文字列 PCL5、PS、TXT は、事前定義クラスです。クラスは、7 文字の文字列とすることができます。 Enabled — デフォルトは yes です。プリンタを有効にするかどうかを yes/no で選択します。 EnableLPD — デフォルトは no です。LPD サービスを有効にするかどうかを yes/no で選択します。 注:各パラメータは本表に示す順序で指定する必要があります。
***Printer={ LPD1 , LPD2, LPD3, LPD4} [LocalName=<name>] [Host=<host>] [Queue=<queue>] [PrinterID=<windows_driver>] [Class=<class_name>] [Enabled={no, yes }]	デフォルトは LPD1 です。 Printer — 設定する LPD プリンタを指定します。 LocalName — プリンタの名前を指定します。LocalName が未指定の場合は、キュー名が使用されます。 Host — プリンタのホスト名を指定します。 Queue — プリンタのキュー名を指定します。 PrinterID — プリンタに使用する Windows ドライバを指定します。指定しなければ、デフォルトの Generic/Text Only が使用されます。 Class — TPAutoconnect の ThinPrint 印刷(クライアント側からプリンタをマッピングする ThinPrint テクノロジー)で使用します。ThinPrint サーバー側と同じテンプレートを使用するために、プリンタをグループ化できます。文字列 PCL5、PS、TXT は、事前定義クラスです。クラスは、7 文字の文字列とすることができます。 Enabled — デフォルトは yes です。プリンタを有効にするかどうかを yes/no で選択します。 wnos.ini ファイルで EnableLocal=yes を設定している場合、wnos.ini ファイルの上記設定は NVRAM に保存されます。 注:各パラメータは本表に示す順序で指定する必要があります。
***LpdSpool={0, 1, 2, 3, 4, 5 , 6, 7, 8, 9, 10}	LPD プリンタに送信する前にすべてのデータをバッファに記憶するスプールのサイズを指定します。
***Printer={ SMB1 , SMB2, SMB3, SMB4} [LocalName=<name>] [Host=¥<domain>¥<host>] [Name=<share_name>] [PrinterID=<windows_driver>] [Class=<class_name>] [Enabled={no, yes }] [EnableLPD={ no , yes}] [Username=<username>] [Password=<password>] [Domain=<domain_name>]	デフォルトは SMB1 です。 Printer — 設定する共有 Microsoft ネットワークプリンタを指定します。 LocalName — 共有プリンタの名前を指定します。 Host — ホストを Microsoft ドメイン内で設定している場合に ¥domain¥host として指定する共有プリンタのホスト名を指定します。それ以外の場合、ホストは¥¥host として指定できます。 Name — 共有プリンタの共有名を指定します。 PrinterID — プリンタに使用する Windows ドライバを指定します。指定しなければ、デフォルトの Generic/Text Only が使用されます。 Class — TPAutoconnect の ThinPrint 印刷(クライアント側からプリンタをマッピングする ThinPrint テクノロジー)で使用します。ThinPrint サーバー側と同じテンプレートを使用するために、プリンタをグループ化できます。文字列 PCL5、PS、TXT は、事前定義クラスです。クラスは、7 文字の文字列とすることができます。 Enabled — デフォルトは yes です。プリンタを有効にするかどうかを yes/no で選択します。

パラメータ	説明
	<p>EnableLPD — デフォルトは no です。LPD プリンタを有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>Username — SMB プリンタを使用できるユーザーのユーザー名を指定します。</p> <p>Password — SMB プリンタを使用できるユーザーのパスワードを指定します。</p> <p>Domain — SMB プリンタのドメイン名を指定します。</p>
<p>**DefaultPrinter={LPD1, LPD2, LPD3, LPD4, COM1, COM2, LPT1, LPT2, SMB1, SMB2, SMB3, SMB4}</p>	<p>デフォルトプリンタを指定します。デフォルトとして設定されているプリンタが有効なことを確認してください。プリンタが無効な場合は、設定も無効になります。</p>
<p>***NetworkPrinter=<host>/<queue> [PrinterID=<windows_driver>] [Enabled={no, yes}]</p>	<p>NetworkPrinter — ネットワーク(LPD)プリンタの設定を指定します。ホストおよびキューパラメータが、プリンタの IP アドレスとキュー名を定義します。</p> <p>PrinterID — Windows プリンタのドライバ名を指定します。</p> <p>Enabled — デフォルトは yes です。ネットワーク(LPD)プリンタを有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p>

5.28 接続設定全般

パラメータ	説明
LongApplicationName={ <u>no</u> , yes}	デフォルトは no です。 デスクトップアイコン名の 38 文字すべてを表示するかどうかを yes/no で選択します。LongApplicationName=no の場合、アイコンは 19 文字までを表示します (19 文字を超える文字と最後の 3 文字は「...」になります)。
EnableRAVE={ <u>yes</u> , no}	デフォルトは yes です。 クライアントが ICA サーバーにあるサポート対象のメディアファイルを Citrix Multimedia Acceleration (RAVE) を使用して再生できるかどうかを yes/no で選択します。これは、すべての ICA 接続向けのグローバルパラメータです。デフォルトは EnableRAVE=yes です。 注: EnableRAVE=no の場合 (または本パラメータがない場合) は、すべてのメディアファイルに Wyse TCX Multimedia が使用されます。 EnableRAVE=yes の場合、RAVE はサポート対象のメディアファイルに対してのみ使用されます。有効な Wyse TCX Multimedia ライセンスが使用されていない場合、EnableRAVE=yes は無視されます。
Multifarm={ <u>no</u> , yes}	デフォルトは no です。 wnos.ini ファイルに対して Citrix マルチファーム機能に対応させるかどうかを yes/no で選択します。Multifarm=yes の場合、PNAgent/PNLite ユーザーは複数の Citrix ファームを認証できます。
Speedbrowser={ <u>on</u> , off}	デフォルトは on です。 ICA Speedscreen Browser Acceleration Function を有効にするかどうかを on/off で選択します。
***FastDisconnect={ <u>no</u> , yes}	デフォルトは no です。 F12 キーを押して ICA セッションを切断するかどうかを yes/no で選択します。 注: FastDisconnectKey が設定されている場合は、後から読み込まれたパラメータ (切断キー) が有効になります。
***FastDisconnectKey={F1, F2, F3, F4, F5, F6, F7, F8, F9, F10, F11, F12, Pause¥Break}	ICA セッションを切断するキーを指定します。 注: FastDisconnect が設定されている場合は、後から読み込まれたパラメータ (切断キー) が有効になります。

パラメータ	説明
<pre> **SessionConfig=ALL [unmapprinters={no, yes}] [unmapserials={no, yes}] [smartcards={no, yes}] [mapdisks={no, yes}] [disablesound={no, yes}] [unmapusb={no, yes}] [DisksReadOnly={no, yes}] [MouseQueueTimer={0-99}] [WyseVDA={no, yes}] [WyseVDA_ENABLE_MMR={yes, no}] [WyseVDA_ENABLE_USB={yes, no}] [WyseVDA_PortRange=<startPort>,<endPort>] [UnmapClipboard={no, yes}] [DefaultColor={0,1,2}] [VUSB_DISKS={yes, no}] [VUSB_AUDIO={yes, no}] [VUSB_VIDEO={yes, no}] [VUSB_PRINTER={yes, no}] [FullScreen={no, yes}] [Resolution={default, <vga_resolution>}] [DisableResetVM={no, yes}] [WyseVDA_ServerPort=<serverPort>] [FontSmoothing={yes, no}] [AutoConnect={yes, no}] [MultiMonitor={yes, no}] </pre>	<p>SessionConfig - すべてのセッションに対する任意設定の接続パラメータのデフォルト設定を指定します。</p> <p>unmapprinters - デフォルトは no です。プリンタのマップを解除するかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>unmapserials - デフォルトは no です。シリアルマップを解除するかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>smartcards - デフォルトは no です。スマートカードを使用するかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>mapdisks - デフォルトは no です。ディスクをマッピングするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>disablesound - デフォルトは no です。サウンドを無効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>unmapusb - デフォルトは no です。USB のマップを解除するかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>DisksReadOnly - デフォルトは no です。大容量ディスクを読み取り専用としてマウントするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>MouseQueueTimer - ICA または RDP セッション (1/100 秒) のマウス操作のデフォルトキュータイマーを指定します。この値は、ネットワークの帯域幅の調整に使用します。</p> <p>WyseVDA - デフォルトは no です。すべての ICA および RDP セッションで、Wyse Virtual Desktop Accelerator を有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>注: Wyse VDA は動作保障対象外です。</p> <p>WyseVDA_ENABLE_MMR - デフォルトは yes です。すべての ICA および RDP セッションで、WyseVDA for TCX MMR を有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>注: Wyse VDA は動作保障対象外です。</p> <p>WyseVDA_ENABLE_USB - デフォルトは yes です。すべての ICA および RDP セッションで、WyseVDA for TCX USB を有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>注: Wyse VDA は動作保障対象外です。</p> <p>WyseVDA_PortRange - VDA クライアントポートの範囲を設定します。ポートの範囲は、以下のルールに従う必要があります。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ポートの範囲は、セミコロン (;) またはコンマ (,) で最初のポートと最後のポートを区切ったリストです。 2. いずれのポートも 1~65535 である必要があります。 3. 最後のポートの番号は、最初のポートの番号より大きい必要があります。たとえば、「WyseVDA_PortRange=3000,3010」であれば、最初のポートが 3000、最後のポートが 3010 です。 <p>UnmapClipboard - デフォルトは no です。すべてのセッションでクリップボードのリダイレクトを無効にするかどうかを yes/no で選択します。ICA および RDP では、クリップボードをリダイレクトするかどうかを指定します。</p> <p>wnos.ini で EnableLocal を yes に設定している場合、wnos.ini ファイルの本設定は NVRAM に保存されます。</p> <p>DefaultColor - セッションに使用するデフォルトの色深度を指定します。0=256 色、1=ハイカラー、2=トゥルーカラーです。</p> <p>VUSB_DISKS、VUSB_AUDIO、VUSB_VIDEO、および VUSB_PRINTER - デフォルトは no です。USB リダイレクト時に TCX Virtual USB または ICA/RDP USB リダイレクトを使用して USB デバイスをサーバーにリダイレクトするかどうかを指定します。デフォルトでは、USB デバイスはローカルデバイスとして設定されます。たとえば、USB ディスクをネットワークディスクとして使用する場合は、「SessionConfig=all mapdisks=yes VUSB_DISKS=no」を設定でき、USB ディスクをサーバー側デバイスとして使用する (セッションのデバイスマネージャで表示) 場合は、「SessionConfig=all mapdisks=no VUSB_DISKS=yes」を設定できます。</p>

パラメータ	説明
(つづき)	<p>FullScreen - デフォルトは no です。デフォルト画面モードを指定します。</p> <p>Resolution - デフォルトは default です。セッションの解像度を指定します。たとえば、640 x 480 などと指定します(サポート対象の解像度を参照してください)。</p> <p>DisableResetVM - デフォルトは no です。「DisableResetVM=yes」を設定すると、「Reset VM」機能は無効になります。デフォルトでは、この機能はサーバー側で制御され、VMware View または Citrix PNA もともに有効です。</p> <p>WyseVDAServerPort - ThinOS VDA クライアントの「WyseVDAServerPort」を設定します。デフォルトポートは 3471 です。ポートの範囲は 1029~40000 にします。たとえば、「WyseVDAServerPort=3000」の場合、VDA サーバーポートは 3000 に設定され、クライアントはこのポートを使用して VDA サーバーに接続します。</p> <p>FontSmoothing - デフォルトは yes です。フォントのスムージングを無効にする場合は、no を設定します。</p> <p>AutoConnect - デフォルトは yes です。自動接続機能を無効にする場合は、no を設定します。</p> <p>MultiMonitor- デフォルトは yes です。マルチモニター機能を無効にするには no を設定します。</p>
<pre> **SessionConfig=ICA [desktopmode={fullscreen, window}] [mapdisksunderz={no, yes, A-Z, a-z, A:-Z:, a:-z:}] [TosIpPrecedence={0-5}] [TosDscp={Default/CS1/CS2/CS3/CS4/CS5/CS6/CS7/AF11/AF12/AF13/AF22/AF23/AF31/AF32/AF33/AF42/AF43}] [DiskMapTo=<a character sequence>] [OutBufCount=<count>] [SysMenu={remote, local}] [SessionReliability={no, yes}] [ondesktop={no, yes, all, none, desktops, applications}] [ProgressiveDisplay={no, yes}] [BranchRepeater={no, yes}] [DisableIcaPing={no,yes}] [AudioQuality={default, high, medium, low}] [USBRedirection={TCX, ICA HDX}] [CGPParseMessageLen={yes, no}] [ZLKeyboardMode={0, 1, 2}] [ZLMouseMode={0, 1, 2}] </pre>	<p>SessionConfig — すべての ICA セッションに対する任意設定の接続パラメータの ICA デフォルト設定を指定します。</p> <p>desktopmode — デフォルトは fullscreen です。ICA PNAgent ログオン使用時に ICA 公開デスクトップの表示モードを指定します。デフォルトは、PNA デスクトップアプリケーションの全画面モードです。 注: desktopmode=window はクラシックデスクトップモード (SysMode=classic)のみ有効になります。</p> <p>mapdisksunderz — デフォルトは no です。デフォルトのドライブレター Z の代わりに使用するドライブレターを指定する値を使用して Z ドライブ配下にディスクをマッピングするかどうかを yes/no で選択します。たとえば、MapdisksUnderZ=X の場合、すべてのディスクがドライブ Z ではなくドライブ X の配下になります。 注: mapdisksunderz=yes は、mapdisks=yes の場合のみ有効です。</p> <p>TosIpPrecedence — TOS フィールドで IP Precedance を設定できます。</p> <p>TosDscp — IP ヘッダーの ToS フィールドのパケット優先度を割り当てます。</p> <p>DiskMapTo — ディスクを文字シーケンスにマッピングするよう指定します。 注: 文字シーケンスは DiskMapTo により使用でき、各文字は各ディスクに順番にマッピングされます。たとえば、RTNM がシーケンスの場合、R が最初のディスク(US100d では D:/)、T が次のディスク(US100d では E:/) というようにマッピングされます。文字「a」~「y」と「A」~「Y」のみが受け付けられます。小文字はすべて大文字に変換されます。範囲外の文字はスキップされます。重複する文字は省略されます。たとえば、#GGefZzedAF1JaE と記述した場合は、GEFDAJ にマッピングされます。セッションにマッピングされるディスクの台数は、設定した有効文字数によって異なります。文字を指定しない場合、ディスクはすべてデフォルトのドライブレターを使用してセッションにマッピングされます。</p> <p>OutBufCount — ICA サーバーとクライアントの出力バッファカウントを指定します。デフォルト値は 0x2c です。</p> <p>SysMenu — デフォルトは local です。シームレスウィンドウのタスクバーボタンを右クリックしたときのシステムメニューモードを指定します。リモートを指定すると、システムメニューがリモートサーバーから表示されます。ローカルを指定すると、ローカルメニューとなります。</p> <p>SessionReliability — デフォルトは no です。セッションの信頼性を有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p>

パラメータ	説明
(つづき) **SessionConfig=ICA	<p> ondesktop — デフォルトは no です。デスクトップに接続アイコンを表示するときのオプションを指定します。 </p> <ol style="list-style-type: none"> PNLiteServer 文で AutoConnectList を設定すると、AutoConnectList パラメータで設定した接続がすべてデスクトップに表示されます。 デフォルトは no で、ondesktop のプロパティをサーバーが制御します。ただし、接続は常に Connection Manager リストと PNA メニューリストに追加されます。 no 以外の場合、接続はローカルシンクライアントが制御します。接続アイコンをデスクトップに表示しない設定の場合、接続アイコンは Connect Manager リストや PNA メニューリストにも追加されません。 <p> all — yes と同様に、接続をすべてデスクトップに表示します。 none — 接続を表示しません。 desktops — 接続のみをデスクトップに表示します。 applications — アプリケーションのみを表示します。接続は ondesktop_list として取り扱われます。たとえば、ondesktop="word; excel" を設定すると、アプリケーション「word」と「excel」のみが表示されません。 </p> <p> ProgressiveDisplay — デフォルトは no です。ICA で Progressive Display を有効にするかどうかを yes/no で選択します。 BranchRepeater — デフォルトは no です。Reducer V3 や High Throughput などの分岐リピータ機能を有効にするかどうかを yes/no で選択します。 注: BranchRepeater={no, yes} オプションパラメータの使用は推奨されません。使用しないでください。 </p> <p> DisableIcaPing — デフォルトは no です。ping を無効にするかどうかを yes/no で選択します。 AudioQuality — デフォルトは default です。ICA セッションの音質を指定します。注: 音声品質は、中程度の音質を推奨します。 例: SessionConfig=ICA AudioQuality=high </p> <p> USBRedirection — デフォルトは ICA HDX です。USB デバイスのリダイレクトチャネルを選択するオプションです。本オプションは、以前の設定「device=vusb type={TCX, HDX}」の代替としての使用をお勧めします。 CGPParseMessageLen — デフォルトは yes です。パッケージ全体を受け取る前に CGP で着信ストリームを構文解析するかどうかを yes/no で選択します。デフォルトでは、CGP はストリームを構文解析します。 ZLKeyboardMode — ネットワーク遅延環境においてクライアントデバイス上の入力テキストの表示を加速することを指定します。(0=オフ、1=オン、2=オート) ZLKeyboardMode — ネットワーク遅延環境においてクライアントデバイス上の入力テキストの表示を加速することを指定します。(0=オフ、1=オン、2=オート) 注: 本オプションパラメータは動作保障されません。使用する場合は、十分に事前検証を行い、問題がないことを確認してください。 ZLMouseMode — ネットワーク遅延環境においてクライアントデバイス上でマウスクリックのための視覚的なフィードバックを加速するように指定します。(0=オフ、1=オン、2=オート) 注: 本オプションパラメータは動作保障されません。使用する場合は、十分に事前検証を行い、問題がないことを確認してください。 </p>

パラメータ	説明
<pre> **SessionConfig=RDP [MaxBmpCache={128-1024}] [DefaultColor={0,1,2}] [EnableNLA]={no, yes} [ForceSpan={no, yes}] [EnableTSMM]={yes, no} [EnableVOR]={yes, no} [EnableRecord]={yes, no} [EnableRFX]={yes, no} [USBRedirection={TCX, RDP}] [EnableGFX]={yes, no} [EnableUDP]={yes, no} [RDPScreenAlign4={yes, no}] [WallPaper]={yes, no} [Dragging]={yes, no} [Animation]={yes, no} [Theme]={yes, no} [TosIpPrecedence={0-5}] [TosDscp={Default/CS1/CS2/CS3/CS4/CS5/ CS6/CS7/AF11/AF12/AF13/AF22/AF23/ AF31/AF32/AF33/AF42/AF43}] [AutoDetectNetwork]={yes, no} [TSGWEnable]={yes, no} </pre>	<p>SessionConfig — すべての RDP セッションに対する任意設定の接続パラメータの RDP デフォルト設定を指定します。</p> <p>MaxBmpCache — 最大ビットマップキャッシュ番号を指定します。これは、RDP セッションのメモリ使用量に影響します。</p> <p>DefaultColor — 自動(0)、16ビット(1)、または 32ビット(2)を指定します。</p> <p>EnableNLA — デフォルトは yes です。RDP でネットワークレベルの認証機能を使用するかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>ForceSpan — デフォルトは no です。RDP Multi Monitor 機能を無効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>EnableTSMM — デフォルトは yes です。RDP マルチメディアリダイレクトを有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>EnableVOR — デフォルトは yes です。RDP8.0 で H.264 コーデックのメディアリダイレクトを有効化します。ただし、RDP の MMR(TSMM)が無効な場合のみ有効化されます。</p> <p>EnableRecord — デフォルトは yes です。ローカルレコードの RDP 機能を有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>EnableRFX — デフォルトは yes です。Bitmap Codec RemoteFX を有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>注: US100d では、RemoteFX のビットマップコーデックのエンコードおよびデコードはローカルリソースの制約により使用できません。本パラメータは有効にしないでください。</p> <p>USBRedirection — デフォルトは TCX です。usb デバイスのリダイレクトチャンネルを選択するオプションです。</p> <p>EnableGFX — デフォルトは no です。RDP8.0 でマルチコーデックエンコーディングを有効化します。</p> <p>EnableUDP — デフォルトは yes です。RDP8.0 で UDP プロトコルの使用を有効化します。</p> <p>RDPScreenAlign4 — デフォルトは no です。RDPScreenAlign4=yes を設定すると、RDP セッションの幅を 4 ピクセルで位置揃えできます。</p> <p>例: SessionConfig=RDP MaxBmpCache=1024 DefaultColor=1 EnableNLA=yes ForceSpan=yes EnableTSMM=no EnableRecord=yes EnableRFX=no RDPScreenAlign4=no 「WallPaper」、「Dragging」、「Animation」、「Theme」オプションにより、RDP エクスペリエンスを設定できます。デフォルトは yes です。</p> <p>TosIpPrecedence — TOS フィールドで IP Precedance を設定できます。</p> <p>TosDscp — IP ヘッダーの ToS フィールドのパケット優先度を割り当てます。</p> <p>AutoDetectNetwork — RDP セッションにおいてデータ転送のネットワーク帯域幅を自動的に設定します。</p> <p>TSGWEnable — Microsoft RDS の公開リソースへ接続するために TS(RD)ゲートウェイの使用を有効化します。</p>
<pre> **UniSession={no, yes} </pre>	<p>クラシックデスクトップモード時のみ有効になります。接続中の RDP セッションに対し、重複して同じ接続先を起動した場合、本パラメータが yes の場合は接続中のセッションを切断し、新しいセッションで再接続します。no の場合は、接続中のセッションがそのまま保持されます。</p>
<pre> **Reconnect={no, yes, <seconds>} </pre>	<p>デフォルトは no です。</p> <p>サーバー切断後のアプリケーションへの自動再接続を有効にするかどうかを yes/no/seconds で選択します。wnos.ini ファイルで EnableLocal=yes を設定している場合、wnos.ini ファイルの本設定は NVRAM に保存されます。</p> <p>注: seconds の値は、接続切断後に自動的に再接続するまでの待ち時間です。負の値を指定すると、起動時以外に自動接続は行いません。絶対値の有効範囲は 1~3600 です。3600 より大きい値を指定すると、自動的に 20 に設定されます。</p>

パラメータ	説明
**NoReducer={ <u>no</u> , yes}	<p>デフォルトは no です(圧縮が可能)。 圧縮を無効にするかどうかを yes/no で選択します。圧縮を無効にする場合は、yes を入力します。 本パラメータは、すべての接続向けのグローバルパラメータです。 NoReducer のデフォルト値を設定します。</p> <p>注: デフォルトでは、ICA と RDP の両方のプロトコルが、ネットワークで転送されるデータの量を最小限に抑えるためにデータを圧縮します。圧縮率は、テキストベースのアプリケーション(Microsoft Word など)では非圧縮データストリームの 50%に達し、グラフィックスアプリケーションでは 40%未満です。</p>
**LowBand={ <u>no</u> , yes}	<p>デフォルトは no です。 音質を低下させ、プロトコル固有のキャッシュサイズを減らすなどの、低速接続用の最適化をすべての接続で有効にするかどうかを yes/no で選択します。wnos.ini ファイルで EnableLocal=yes を設定している場合、wnos.ini ファイルの本設定は NVRAM に保存されます。</p>
**icaBrowsing={udp, <u>http</u> }	<p>デフォルトは http です。 デフォルトのブラウジングプロトコルを設定します。この設定は、各接続プロパティの HttpBrowsing パラメータで上書きできます。選択したブラウジング方法は、アクセス中のサーバーの方法に一致させる必要があります。wnos.ini ファイルで EnableLocal=yes を設定している場合、wmos.ini ファイルの本設定は NVRAM に保存されます。</p>
**Alternate={ <u>no</u> , yes}	<p>デフォルトは no です。 ファイアウォールを通過するために ICA マスターブラウザから返される代替 IP アドレスを使用するかどうかを yes/no で選択します。wnos.ini ファイルで EnableLocal=yes を設定している場合、wnos.ini ファイルの本設定は NVRAM に保存されます。</p>
**Seamless={ <u>no</u> , yes} [HideTaskbar={0, 1, 2, 3}] [FullscreenReserved={ <u>no</u> , yes}]	<p>デフォルトは no です。 Seamless — ICA 接続パラメータについて、ICA 公開アプリケーションのデフォルト解像度を Seamless に設定するかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>注: クラシックデスクトップモード(SysMode=classic)の場合のみ設定可能です。</p> <p>HideTaskbar — デフォルトは 0 です。シームレスウィンドウを最大化するときのタスクバーの状態を指定します。 0 — タスクバーを非表示にします。 1 — シームレスウィンドウを全画面表示する場合、タスクバーが非表示になります。非表示のタスクバーは、マウスを画面の一番下に移動すると表示されます。wnos.ini ファイルで EnableLocal=yes を設定している場合、wnos.ini ファイルの本設定(FullscreenReserved パラメータは含まない)は NVRAM に保存されます。</p> <p>Seamless=yes HideTaskbar=2 を設定すると、自動非表示タスクバー機能を無効なり、HideTaskbar=1 と同様に最大解像度が ICA サーバーに通知されます。</p> <p>Seamless=yes HideTaskbar=3 を設定すると、最大化しても画面はタスクバーに重なりませんが、サーバー側のセッションサイズは全画面サイズとして通知されます。</p> <p>Seamless=yes、FullscreenReserved を設定しアプリケーションを全画面モードに設定している場合は、シームレスモードではなく全画面モードでアプリケーションが起動します。</p>

5.29 接続パラメータ

パラメータ	説明
**Connect={ICA, RDP}	<p>重要: INI ファイルを使用してクライアントを設定する場合は、本パラメータを使用する必要があります。</p> <p>Connect — 接続プロトコル。オプションパラメータについては、本書の「第6章(接続パラメータのオプション)」の説明に従ってください。</p>

5.30 イベントログ

パラメータ	説明
***SaveSysinfo={usb}	最後にマウントした USB ディスクに US100d イベントログを保存するよう設定します。 イベントログ情報を保存するファイルは WTOS_log.txt という名前で、USB ディスクのルートパスにあります。

6. 接続パラメータのオプション

本章では、本製品が使用できる接続のオプションパラメータを紹介します。

6.1 ICA 接続のオプションパラメータ

Connect=ICA 使用時に ICA 接続に指定できるオプションパラメータを記載しています。

備考：

{username}.ini ファイルで使用されているオプションは、ユーザーサインオフ後、wnos.ini ファイルで設定されている値に戻ります。たとえば、接続を切断してから 20 秒後に再接続する Reconnect=yes オプションを {username}.ini ファイルに記述している場合、シンクライアントをサインオフすると、他のサインインユーザーが各自のユーザープロファイルを使用できるように、Reconnect の値は wnos.ini ファイルに記述されているデフォルト値「no」（Reconnect=no）に戻ります（管理者が wnos.ini ファイルのデフォルト値を変更していない場合）。

ICA 接続オプション

オプションパラメータ	説明
[Alternate={ <u>no</u> , yes}]	デフォルトは no です。 ファイアウォールを通過するために ICA マスターブラウザから返される代替 IP アドレスを使用するかどうかを yes/no で選択します。
[AudioQualityMode={ <u>0</u> , 1, 2, 3}]	デフォルトは 0 です。 セッションの音質を指定します。 0 デフォルト 1 高品質 2 中程度の品質 3 低品質
[Autoconnect={ <u>0</u> -99}]	デフォルトは 0 です。 サインオン有効時、サインオン後にセッションを自動的に開始するために使用します。 0~99 の値は、セッションを自動開始するまでの時間です（秒単位）。
[AppendUsername=1]	この拡張オプションを使用すると、クライアント側でユーザー名を ICA セッションのタイトルバーに表示させることができます。
[BranchRepeater ={ <u>no</u> , yes}]	デフォルトは no です。 Reducer V3 や High Throughput などの分岐リピータ機能を有効にするかどうかを yes/no で選択します。
[Browserip=<list of browsers>]	ICA ブラウザを指定するための IP アドレスまたは DNS 登録名のリストです。リスト項目はセミコロンまたはコンマで区切ってください。
[Colors={256, <u>high</u> , true}]	デフォルトは high です。 セッションカラーモードを指定します。 注:256 色の ICA セッションを起動すると正常に色表示されない問題があったため、対応としてデフォルトでセッション色数 8 ビット(256 色)を無効にしています。256 色を指定しないでください。

オプションパラメータ	説明
[Command=<start command>]	サーバーにログオンした後に実行されるコマンドの文字列群を指定します。文字列の長さの上限は 127 文字です。 注: 公開アプリケーション(Application=)を指定した場合は使用できません。ホスト(Host=)を指定した場合に設定可能です。
[Description=<string description>]	接続の説明です。空白や引用符を埋め込むには、文字列の説明を引用符で囲みます。引用符を使用する場合は、一般的な入れ子化ルールを使用します。最大 38 文字指定することができます。
[Directory=<working directory>]	サーバーにログオンした後に作業ディレクトリとして使用するディレクトリを指定します。最大 63 文字指定することができます。 注: 公開アプリケーション(Application=)を指定した場合は使用できません。ホスト(Host=)を指定した場合に設定可能です。
[Disablesound={ no , yes, 2} or { 0 , 1, 2}]	デフォルトは no です。 接続開始時にリモートサウンドを無効にするかどうかを指定します。
[Domainname={<domain name>,\$DN}]	Windows ネットワークで使用するドメイン名を指定します。\$DN を指定すると、シンクライアントサインオン時のドメイン名が使用されます。最大 19 文字指定することができます。
[Encryption={None, Basic , 40, 56, 128, Login-128}]	デフォルトは Basic です。 接続セキュリティの暗号化レベルを指定します。最高レベルが 128 ビットセキュリティです。Login-128 は、ログインのみ 128 ビット暗号化するオプションです。最低レベルは None です。 注: 指定する暗号化レベルはサーバーでサポートされている必要があります。サポートされていない場合、接続は失敗します。
[Fullscreen={ no , yes}]	デフォルトは no です。 全画面でセッションを実行するかどうかを yes/no で選択します。 Fullscreen=no の場合、セッションはウィンドウ分割画面で実行されます。
[Host={<name>, <IP address>, \$SYS VAR}] or [Application=<published application>]	シンクライアントが接続しようとするサーバーのホスト名または IP アドレスのリストです。あるサーバーへの接続が失敗すると、リスト内の次のサーバーへの接続を試みます。リスト項目は、セミコロンまたはコンマで区切ってください。 注: \$UN は、サインオンユーザー名の使用を指定するもので、{username}.ini ファイルに設定する必要があります。{username}.ini ファイルで Host=\$UN を設定すると、サインオンユーザー名としてホスト名が表示されます。wnos.ini ファイルで Host=\$UN を設定すると、デフォルトの Start がホスト名として表示されます。 Application — 起動する公開アプリケーションを定義します。ホストを指定しない場合、アプリケーションの指定は必須です。 注: マルチバイト文字 (日本語等) でアプリケーション名を指定した場合、セッションの起動に失敗します。シングルバイト文字で指定してください。
[HttpBrowsing={ no , yes}]	デフォルトは no です。 http ブラウジングプロトコルを選択するかどうかを yes/no で選択します。 UDP (User Datagram Protocol) を使用する場合は HttpBrowsing=no を指定します。 注: 本オプションは、ICABrowsing パラメータで設定されたデフォルトのブラウジング方法を上書きするために使用します。
[Icon={default, <bitmap file>}]	シンクライアントのデスクトップに表示する接続アイコンを指定します。接続用のシステムデフォルトアイコンを表示する場合は、Icon=default を指定します。デフォルト以外のアイコンを使用する場合は、ビットマップファイルの名前 (拡張子を含む) を入力します。ファイルが FTP サーバーの wnos%bitmap ディレクトリにあることを確認してください。Icon=が指定されず、アイコンが PNAgent/PNLite サーバーによって指定されていない場合、接続用アイコンは表示されません。

オプションパラメータ	説明
[KeepAlive={0-127}]	セッションが非アクティブになった後、セッションの接続(アライブ)状態を維持する分数を指定します。この期間中にネットワークトラフィックが失われた場合は、ダミーパケットがサーバーに送信されます。デフォルトは 10 です。
[LocalCopy={ no , yes}]	デフォルトは no です。 ローカル NVRAM への接続を保存するかどうかを yes/no で選択します。Description オプションの接続説明をローカル接続テーブルのインデックスキーとして使用します。一致を検出すると、項目が更新されます。一致が検出されない場合は、新しい項目が作成されます。 ローカル項目の最大合計数は 16 です。
[Logon_mode={ local-user , smartcard, user-specified}]	デフォルトは local-user です。 選択したアプリケーションセットまたは ICA 接続でユーザーを認証する方法を指定します。
[Lowband={ no , yes}]	デフォルトは no です。 音質を低下させ、プロトコル固有のキャッシュサイズを減らすなどの、低速接続用の最適化を有効にするかどうかを yes/no で選択します。
[Mapdisks={ no , yes}]	デフォルトは no です。 接続開始時に接続されている USB フラッシュメモリドライブを自動接続してマッピングするかどうかを yes/no で選択します。
[Mapdisksunderz={ no , yes}]	デフォルトは no です。 ディスクを Z ボリュームラベル配下でマッピングするかどうかを yes/no で選択します。 注: Mapdisksunderz=yes は、Mapdisks=yes の場合のみ有効です。
[NO_FontSmoothing={ no , yes}]	デフォルトは no です(デフォルトでは、フォントのスムージングが有効です)。 フォントのスムージングを無効にするかどうかを yes/no で選択します。 フォントのスムージングを無効にする場合は、yes を設定します。
[NoReducer={ no , yes}]	デフォルトは no です(圧縮が可能)。 圧縮を無効にするかどうかを yes/no で選択します。圧縮を無効にする場合は、yes を入力します。 本オプションは、Connect 文のオプションです。指定した接続に対してのみ NoReducer の値を設定します。 注: デフォルトでは、ICA プロトコルは、ネットワークで転送されるデータの量を最小限に抑えるためにデータを圧縮します。圧縮率は、テキストベースのアプリケーション(Microsoft Word など)では非圧縮データストリームの 50%に達し、グラフィックスアプリケーションでは 40%未満です。
[Password={<password>, \$SYS_VAR}]	アプリケーションサーバーにログインするためのパスワードです。従来のログインパスワードや変数を使用できます。最大 19 文字指定することができます。 password の値は、従来のログインパスワードです。 \$SYS_VAR の値は、本書の「4 章(INI ファイルの作成規則と注意事項)」表 1 に示すシステム変数の値です。 注: アプリケーションサーバーのパスワードは暗号化されていないので、指定しないことを強くお勧めします。接続確立時にはパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。
[Password-enc=<encrypted_password>]	接続パスワードとして暗号化された文字列を指定します。

オプションパラメータ	説明
[Reconnect={ no , yes, 1-3600}]	<p>デフォルトは no です。</p> <p>サーバー切断後のアプリケーションへの自動再接続を有効にするかどうかを制御します。</p> <p>yes — 自動で再接続します(デフォルトの遅延時間は 20 秒)。</p> <p>no — 自動で再接続しません。</p> <p>1~3600 — 再接続するまでの時間を 1~3600 の整数で指定します(秒単位)。たとえば、50 を指定すると、50 秒にアプリケーションに自動的に再接続されます。</p>
[Resolution={ default , Seamless, <monitor resolution>}]	<p>デフォルトは default です。</p> <p>接続ディスプレイの解像度を指定します。</p> <p>default — ウィンドウのフレームと枠がない最新のデスクトップ表示設定で接続を開始します。</p> <p>Seamless — 公開アプリケーションに接続する場合に使用します。シームレス接続では、MetaFrame ホストがアプリケーションに最適な接続ウィンドウを選択します。</p> <p><モニターの解像度> — XxY 形式(例: 1024x768)で指定します。</p> <p>注: ZERO ランチパッドモード(SysMode=VDI)の場合は、default のみ選択可能です。他の設定は使用できません。</p>
[SessionReliability={ no , yes}]	<p>デフォルトは no です。</p> <p>セッションの信頼性を有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>注: US100d は、サーバー上のセッションの信頼性についての新たな設定を取得する UDP ブラウジングをサポートしていません。シンクライアントは、常にデフォルトポートに接続します。</p>
[UniSession={ no , yes}]	<p>デフォルトは no です。</p> <p>接続を一度にひとつずつ開始するユニセッションを使用するかどうかを yes/no で選択します。</p>
[UnmapClipboard={ no , yes}]	<p>デフォルトは no です。</p> <p>クリップボードにリダイレクトする場合に ICA セッションでクリップボードのリダイレクトを無効にするかどうかを yes/no で選択します。</p>
[UnmapPrinters={ no , yes}]	<p>デフォルトは no です。</p> <p>接続開始時にローカルプリンタに自動接続するかどうかを yes/no で選択します。</p>
[UnmapSerials={ no , yes}]	<p>デフォルトは no です。</p> <p>接続開始時にローカルシリアルに自動接続するかどうかを yes/no で選択します。</p>
[UnmapUSB={ no , yes}]	<p>デフォルトは no です。</p> <p>接続開始時にローカル USB デバイス(仮想 USB)に自動接続するかどうかを yes/no で選択します。</p>
[Username={<username>, \$SYS_VAR}]	<p>アプリケーションサーバーにログインするユーザーの名前を指定します。従来のログインユーザー名や変数を使用できます。最大 31 文字指定することができます。</p> <p>ユーザー名の値は、従来のログオンユーザー名です。</p> <p>\$SYS_VAR の値は、本書の「4 章(INI ファイルの作成規則と注意事項)」表 1 に示すシステム変数の値です。</p> <p>注: \$IP@\$DN などのすべての変数を組み合わせることができます。</p>
[Username-enc=<encrypted_username>]	<p>接続ユーザー名として暗号化された文字列を指定します。</p>
[WyseVDA={ no , yes}]	<p>デフォルトは no です。</p> <p>すべての ICA セッションで、Wyse Virtual Desktop Accelerator を有効にするかどうかを yes/no で選択します。</p> <p>注: Wyse VDA は動作保障対象外です。</p>

6.2 RDP 接続のオプションパラメータ

Connect=RDP 使用時に RDP 接続に指定できるオプションパラメータを記載しています。

備考：

{username}.ini ファイルで使用されているオプションは、ユーザーサインオフ後、wnos.ini ファイルで設定されている値に戻ります。たとえば、接続を切断してから 20 秒後に再接続する Reconnect=yes オプションを {username}.ini ファイルに記述している場合、シンクライアントをサインオフすると、他のサインインユーザーが各自のユーザープロファイルを使用できるように、Reconnect の値は wnos.ini ファイルに記述されているデフォルト値「no」（Reconnect=no）に戻ります（管理者が wnos.ini ファイルのデフォルト値を変更していない場合）。

RDP 接続オプション

オプションパラメータ	説明
[Autoconnect={ <u>0</u> -99}]	デフォルトは 0 です。 サインオン有効時、サインオン後にセッションを自動的に開始するために使用します。 0~99 の値は、セッションを自動開始するまでの時間です（秒単位）。
[Colors={256, <u>high</u> , true}]	デフォルトは high です。 セッションカラーモードを指定します。 注: 256 色の RDP セッションを起動すると正常に色表示されない問題があったため、対応としてデフォルトでセッション色数 8 ビット(256 色)を無効にしています。256 色を指定しないでください。
[Command=<start command>]	サーバーにログオンした後に実行されるコマンドの文字列を指定します。文字列の長さの上限は 127 文字です。
[Console={ <u>no</u> , yes}]	デフォルトは no です。 コンソールモードでセッションにログインするかどうかを yes/no で選択します。 注: RDP 接続で Console=yes を設定すると、TimeZone リダイレクト機能が無効になります。
[Description=<string description>]	接続の説明です。空白や引用符を埋め込むには、文字列の説明を引用符で囲みます。引用符を使用する場合は、一般的な入れ子化ルールを使用します。最大 38 文字指定することができます。
[Directory=<working directory>]	サーバーにログオンした後に作業ディレクトリとして使用するディレクトリを指定します。最大 63 文字指定することができます。
[Disablesound={ <u>no</u> , yes, 2} or { <u>0</u> , 1, 2}]	デフォルトは no です。または 0 です。 接続開始時にリモートサウンドを無効にするかどうかを指定します。 注: Disablesound=2 は RDP セッションでのみ機能し、リモートコンピュータではリモートコンピュータのサウンドを無効にすべきであることを示します。
[Domainname={<domain name>,\$DN}]	Windows ネットワークで使用するドメイン名を指定します。\$DN を指定すると、シンクライアントサインオンドメイン名が使用されます。最大 19 文字指定することができます。
[Fullscreen={ <u>no</u> , yes}]	デフォルトは no です。 全画面でセッションを実行するかどうかを yes/no で選択します。 Fullscreen=no の場合、セッションはウィンドウ分割画面で実行されます。

オプションパラメータ	説明
[Host={<name>, <IP address>, \$SYS VAR}]	<p>シンクライアントが接続しようとするサーバーのホスト名または IP アドレスのリストです。あるサーバーへの接続が失敗すると、リスト内の次のサーバーへの接続を試みます。リスト項目は、セミコロンまたはコンマで区切ってください。</p> <p>注:\$UNは、サインオンユーザー名の使用を指定するもので、{username}.iniファイルに設定する必要があります。{username}.iniファイルでHost=\$UNを設定すると、サインオンユーザー名としてホスト名が表示されます。wnos.iniファイルでHost=\$UNを設定すると、デフォルトのStartがホスト名として表示されます。</p>
[Icon={default, <bitmap file>}]	<p>シンクライアントのデスクトップに表示する接続アイコンを指定します。接続用のシステムデフォルトアイコンを表示する場合は、Icon=defaultを指定します。デフォルト以外のアイコンを使用する場合は、ビットマップファイルの名前(拡張子を含む)を入力します。ファイルがFTPサーバーのwnos%bitmap ディレクトリにあることを確認してください。Icon=が指定されず、アイコンがPNAgent/PNLiteサーバーによって指定されていない場合、接続用アイコンは表示されません。</p>
[KeepAlive={0-127}]	<p>セッションが非アクティブになった後、セッションの接続(アライブ)状態を維持する分数を指定します。この期間中にネットワークトラフィックが失われた場合は、ダミーパケットがサーバーに送信されます。デフォルトは10です。</p>
[LocalCopy={no, yes}]	<p>デフォルトはnoです。 ローカルNVRAMへの接続を保存するかどうかをyes/noで選択します。Description オプションの接続説明をローカル接続テーブルのインデックスキーとして使用します。一致を検出すると、項目が更新されます。一致が検出されない場合は、新しい項目が作成されます。 ローカル項目の最大合計数は16です。</p>
[Logon_mode=prompt]	<p>RDPセッションに再接続する前にユーザーがユーザー名、パスワード、ドメインを入力できるダイアログボックスをポップアップ表示することを指定します。これにより、サーバーリダイレクト時に認証情報を入力する必要がなくなります(負荷分散)。</p>
[Lowband={no, yes}]	<p>デフォルトはnoです。 音質を低下させ、プロトコル固有のキャッシュサイズを減らすなどの、低速接続用の最適化を有効にするかどうかをyes/noで選択します。</p>
[Mapdisks={no, yes}]	<p>デフォルトはnoです。接続開始時に接続されているUSBフラッシュメモリドライブを自動接続してマッピングするかどうかをyes/noで選択します。</p>
[NoReducer={no, yes}]	<p>デフォルトはnoです(圧縮が可能)。 圧縮を無効にするかどうかをyes/noで選択します。圧縮を無効にする場合は、yesを入力します。 本オプションは、Connect文のオプションです。指定した接続に対してのみNoReducerの値を設定します。</p> <p>注:デフォルトでは、RDPプロトコルは、ネットワークで転送されるデータの量を最小限に抑えるためにデータを圧縮します。圧縮率は、テキストベースのアプリケーション(Microsoft Word など)では非圧縮データストリームの50%に達し、グラフィックスアプリケーションでは40%未満です。</p>

オプションパラメータ	説明
[Password={<password>, \$SYS_VAR}]	アプリケーションサーバーにログインするためのパスワードです。従来のログインパスワードや変数を使用できます。最大 19 文字指定することができます。 password の値は、従来のログオンパスワードです。 \$SYS_VAR の値は、本書の「4 章(INI ファイルの作成規則と注意事項)」表 1 に示すシステム変数の値です。 注: アプリケーションサーバーのパスワードは暗号化されていませんので、指定しないことを強くお勧めします。接続確立時にはパスワードの入力を求めるプロンプトが表示されます。
[Password-enc=<encrypted_password>]	接続パスワードとして暗号化された文字列を指定します。
[RDPAudioRecord={no, yes}]	デフォルトは no です。 ユーザーがサーバーにオーディオを記録できるかどうかを指定するかどうかを yes/no で選択します (Windows 7 Enterprise が必要です)。
[Rdp_No_Animation={no, yes}]	デフォルトは no です。 メニューとウィンドウのアニメーション機能を無効にするかどうかを yes/no で選択します。機能を無効にする場合は yes を使用します。
[Rdp_No_Dragging={no, yes}]	デフォルトは no です。 ウィンドウドラッグ時にコンテンツを表示する機能を無効にするかどうかを yes/no で選択します。機能を無効にする場合は yes を使用します。
[Rdp_No_Fontsmoothing={no, yes}]	デフォルトは no です。 フォントスムージング機能を無効にするかどうかを yes/no で選択します。機能を無効にする場合は yes を使用します。
[Rdp_No_Theme={no, yes}]	デフォルトは no です。 テーマ機能を無効にするかどうかを yes/no で選択します。機能を無効にする場合は yes を使用します。
[Rdp_No_Wallpaper={no, yes}]	デフォルトは no です。 壁紙機能を無効にするかどうかを yes/no で選択します。機能を無効にする場合は yes を使用します。
[Reconnect={no, yes, 1-3600}]	デフォルトは no です。 サーバー切断後のアプリケーションへの自動再接続を有効にするかどうかを制御します。 yes — 自動で再接続します (デフォルトの遅延時間は 20 秒)。 no — 自動で再接続しません。 1~3600 — 再接続するまでの時間を 1~3600 の整数で指定します (秒単位)。たとえば、50 を指定すると、50 秒にアプリケーションに自動的に再接続されます。
[Resolution={default, <monitor resolution>}]	デフォルトは default です。 接続ディスプレイの解像度を指定します。 default — ウィンドウのフレームと枠がない最新のデスクトップ表示設定で接続を開始します。 <モニターの解像度> — XxY 形式 (例: 1024x768) で指定します。 注: ZERO ラウンチパッドモード (SysMode=VDI) の場合は、default のみ選択可能です。他の設定は使用できません。
[Smartcards={no, yes}]	デフォルトは no です。 接続開始時にスマートカードのログインサーバーを使用するかどうかを yes/no で選択します。
[UniSession={no, yes}]	デフォルトは no です。 接続を一度にひとつずつ開始するユニセッションを使用するかどうかを yes/no で選択します。
[UnmapClipboard={no, yes}]	デフォルトは no です。 クリップボードにリダイレクトする場合に RDP セッションでクリップボードのリダイレクトを無効にするかどうかを yes/no で選択します。

オプションパラメータ	説明
[UnmapPrinters={ no , yes}]	デフォルトは no です。 接続開始時にローカルプリンタに自動接続するかどうかを yes/no で選択します。
[UnmapSerials={ no , yes}]	デフォルトは no です。 接続開始時にローカルシリアルに自動接続するかどうかを yes/no で選択します。
[UnmapUSB={ no , yes}]	デフォルトは no です。 接続開始時にローカル USB デバイス(仮想 USB)に自動接続するかどうかを yes/no で選択します。
[Username={<username>, \$SYS_VAR}]	アプリケーションサーバーにログインするユーザーの名前を指定します。 従来のログインユーザー名や変数を使用できます。最大 31 文字指定することができます。 ユーザー名の値は、従来のログインユーザー名です。 \$SYS_VAR の値は、表 1 に示すシステム変数の値です。 注: \$IP@\$DN などのすべての変数を組み合わせることができます。
[Username-enc=<encrypted_username>]	接続ユーザー名として暗号化された文字列を指定します。
[WyseVDA={ no , yes}]	デフォルトは no です。 すべての RDP セッションで、Wyse Virtual Desktop Accelerator を有効にするかどうかを yes/no で選択します。 注: Wyse VDA は動作保障対象外です。
AutoDetectNetwork={no, yes }	デフォルトは yes です。 RDP の回線速度自動検出を有効にします。
TSGWENABLE={ no , yes }	デフォルトは no です。TS ゲートウェイの使用の有効/無効を設定します。
TSGWUSESAMEINFO={ no , yes}	デフォルトは no です。RDP 接続と同じ資格情報を使用するかどうかを設定します。
TSGWSERVER=<hostname>	TS ゲートウェイサーバーを指定します。
TSGWUsername=<username>	TS ゲートウェイの資格認証にユーザー名を設定します。
TSGWUsername-enc=<encrypted-username>	TS ゲートウェイの資格認証にユーザー名に暗号化された文字列を使用します。
TSGWPassword=<password>	TS ゲートウェイの資格認証にパスワードを設定します。
TSGWPassword-enc=<encrypted-password>	TS ゲートウェイの資格認証にパスワードに暗号化された文字列を使用します。
TSGWDomainName=<domainname>	TS ゲートウェイの資格認証にドメイン名を設定します。

7. 基本的な使用例

作業開始の一助として、基本的な以下の4つの使用例を示します。

- ユーザーアカウントを有効にする使用例
- キオスク設定での使用例
- ブローカーサーバー接続の使用例
- IEEE802.1x 認証の使用例

本章で使用する ini ファイルは <http://www.nec.co.jp/products/thinclient/support/index.shtml> にアクセスしてダウンロードが可能です。サンプル INI ファイルリンクをクリックして、圧縮ファイルを任意のフォルダにダウンロードしてください。

圧縮ファイルには以下のようなものがあります。

- wnos.login
ユーザーアカウントを有効にするサンプル wnos.ini ファイル
- wnos.kiosk
キオスク設定のサンプル wnos.ini ファイル
- wnos.cnb
ブローカーサーバー接続のサンプル wnos.ini ファイル
- user.ini
個々のユーザープロファイルのサンプル{username}.ini ファイル
- mac-address.ini
端末固有の設定のサンプル\$MAC.ini ファイル

※ 各サンプル wnos ファイルの拡張子 (.login/.kiosk/.cnb) は使用する際に.ini へ変更してください。

7.1 ユーザーアカウントを有効にする使用例

1. ASCII テキストエディタで wnos.ini を作成します。

```
#*****
#*                               General                               *
#*****

Autoload=1

#*****
#*                               Time                               *
#*****

Timeserver=<server_list> ¥
    Timeformat="24-hour format" ¥
    Dateformat=yyyy/mm/dd

TimeZone="GMT + 09:00" ¥
    ManualOverride=no ¥
    Daylight=no Start=030507 End=100507 ¥
    TimeZoneName="Tokyo Standard Time" ¥
    DayLightName="Tokyo Standard Time"

#*****
#*                               Sign-On                               *
#*****

SignOn=yes
```

2. 赤字箇所を使用する環境に合わせて編集します。編集後、ファイル名を wnos.ini で保存します。

3. ASCII テキストエディタで {username}. ini ファイルを作成します。

```
#*****
#*                               PASSWORD                               *
#*****

PASSWORD = IFCWxyNu1u48o

#*****
#*                               ICA                               *
#*****

#-----
#-                               ICA Session 1                               -
#-      Each line but the last must end with a '¥'                               -
#-----

#CONNECT=ICA ¥
#      Host=<IP Address or DNS name> ¥
#      Description="<string description>"

#*****
#*                               RDP                               *
#*****

#-----
#-                               RDP Session 1                               -
#-      Each line but the last must end with a '¥'                               -
#-----

#CONNECT=RDP ¥
#      Host=<IP Address or DNS name> ¥
#      Description="<String_description>"
```

4. ここでは RDP 接続を使用するものとし、Connect=RDP の#コメントをはずして使用します。赤字箇所を使用する環境に合わせて編集します。編集後、ファイル名を任意のユーザーアカウント名（例：User01. ini）にして保存します。
5. 本書の「4 章(サーバー上のフォルダ構造と各メカニズム)」を参照し、手順 2. の wnos. ini と手順 4. の {username}. ini をファイルサーバー上に配置します。
6. US100d を起動すると、ローカルログオンダイアログが表示されます。”パスワードの変更”にチェックを入れ、ユーザー名は手順 3. で使用したユーザーアカウント名（例：User01）を入力します。パスワードには”NEC#123”を入力します。
7. 新しいパスワードの設定ダイアログが表示されます。[新しいパスワード]および[パスワード確認]テキストボックスに新しいパスワードを入力し、[OK]ボタンをクリックします。{username}. ini の PASSWORD パラメータの暗号化文字列が変更されます。
8. 「パスワードが変更されました」と完了メッセージが表示されます。これで次回ログオン時は変更後のパスワードでログオンします。

9. [ホーム]アイコンの接続先一覧から手順 4. で設定した RDP 接続先を選択し、セッションを起動します。

7.2 キオスク設定での使用例

1. ASCII テキストエディタで wnos.ini を作成します。
2. 赤字箇所を使用する環境に合わせて編集します。編集後、ファイル名を wnos.ini で保存します。

```
#*****
#*                               General                               *
#*****

Autoload=1

Privilege=Low

AutoSignoff=yes ¥
Shutdown=yes

SysMode=VDI

#*****
#*                               Time                               *
#*****

Timeserver=<server_list> ¥
Timeformat="24-hour format" ¥
Dateformat=yyyy/mm/dd

TimeZone="GMT + 09:00" ¥
ManualOverride=no ¥
Daylight=no Start=030507 End=100507 ¥
TimeZoneName="Tokyo Standard Time" ¥
DayLightName="Tokyo Standard Time"

#*****
#*                               Sign-On                               *
#*****

SignOn=no

#*****
#*                               Include                               *
#*****

Include=$MAC.ini
```

3. ASCII テキストエディタで \$MAC.ini ファイルを作成します。

```
#*****
#*                               ICA                               *
#*****

#-----
#-                               ICA Session 1                               -
#-                               Each line but the last must end with a ' ¥'                               -
```

```

#-----
#CONNECT=ICA ¥
#   AutoConnect=1 ¥
#   Description="<string description>" ¥
#   Username=<username> ¥
#   Password=<password> ¥
#   Domainname=<domainname> ¥
#   Browserip=<browser ip> ¥
#   Application=<published application> ¥

#*****
#*                               RDP                               *
#*****

#-----
#-                               RDP Session 1                       -
#-   Each line but the last must end with a '¥'                       -
#-----

#CONNECT=RDP ¥
#   AutoConnect=1 ¥
#   Host=<IP Address or DNS name> ¥
#   Description="<String_description>" ¥
#   Username=<username> ¥
#   Password=<password> ¥
#   Domainname=<domainname>

#*****
#*                               Exit                               *
#*****

Exit=all

```

4. ここでは RDP 接続を使用するものとし、Connect=RDP の#コメントをはずして使用します。手順 3.の \$MAC.ini をファイルの赤字箇所を使用する環境に合わせて編集します。編集後、ファイル名を使用する端末の MAC アドレス(例 : 0080xxxxxxx.ini)にして保存します。
5. 本書の「4章(サーバー上のフォルダ構造と各メカニズム)」を参照し、手順2.の wnos.ini と手順4.の \$MAC.ini をファイルサーバー上に配置します。
6. US100d を起動すると、下記の設定で動作します。
 - ZERO ラウンチパッドモード(SysMode=VDI)で起動します。
 - ローカルログオンダイアログは表示されません(SignOn=no)。
 - Low 権限(Privilege=Low)で動作します。
 - インクルード文により、\$MAC.ini が読み込まれます。
7. \$MAC.ini の Connect=RDP の自動接続オプション(AutoConnect=1)が有効なため、自動で接続先仮想 PC へログオンします。
8. 接続先仮想 PC からログオフすると、自動シャットダウン(AutoSignoff=yes Shutdown=yes)が有効のため、US100d はシャットダウンされます。

7.3 ブローカーサーバー接続の使用例

1. ASCII テキストエディタで wnos.ini を作成します。

```

#*****
#*                               General                               *
#*****

Autoload=1

SysMode=VDI

#*****
#*                               Time                               *
#*****

Timeserver=<server_list> ¥
    Timeformat="24-hour format" ¥
    Dateformat=yyyy/mm/dd

TimeZone="GMT + 09:00" ¥
    ManualOverride=no ¥
    Daylight=no Start=030507 End=100507 ¥
    TimeZoneName="Tokyo Standard Time" ¥
    DayLightName="Tokyo Standard Time"

#*****
#*                               Sign-On                             *
#*****

SignOn=yes

#*****
#*                               Connection Broker                     *
#*****

#-----
#-                               XenApp/XenDesktop (WebInterface)      -
#-                               Each line but the last must end with a '¥' -
#-----

#PnLiteServer=<PNAgentSite URL>

#-----
#-                               XenApp/XenDesktop (StoreFront)        -
#-                               Each line but the last must end with a '¥' -
#-----

#PnLiteServer=<PNAgentSite URL> ¥
#    StoreFront=yes

#-----
#-                               Microsoft VDI                          -
#-                               Each line but the last must end with a '¥' -
#-----

#ConnctionBroker=Microsoft

```

```
#VDIBroker=<URL>

#-----
#-                VMware View                -
#-      Each line but the last must end with a '¥'      -
#-----

#ConnctionBroker=VMware

#VDIBroker=<URL>
```

2. 赤字箇所を使用する環境に合わせて編集します。ここではコネクションブローカーに XenApp を使用するものとし、StoreFront 用の PnliteServer の#コメントを外して使用します。編集後、ファイル名を wnos.ini で保存します。
3. 本書の「4章(サーバー上のフォルダ構造と各メカニズム)」を参照し、手順 2.の wnos.ini をファイルサーバー上に配置します。
4. US100d を起動すると、サインオンダイアログが表示されます。資格情報を入力しブローカーサーバーへサインオンすると、ZERO ラウンチパッドモード(SysMode=VDI)で起動します。[ホーム]アイコンの接続先メニューに取得された公開アプリケーションリストが表示されます。

7.4 IEEE802.1X 認証の使用例

無線 LAN の設定例です。以下は IEEE802.1X 認証で、EAP-TLS 認証または EAP-PEAP 認証を使用する場合の例です。必要な証明書をあらかじめ US100d にインポートする必要があります。

```

#*****
#*                Wireless LAN                *
#*****

#Device=Wireless ¥
#   Mode=Infrastructure ¥
#   SSID=<SSID>

#-----
#-                EAP-TLS                    -
#-                WPA2-Enterprise GCMP (AES)  -
#-----

#IEEE8021X=yes ¥
#   Network=wireless ¥
#   Profile=<SSID> ¥
#   access=WPA2-ENT ¥
#   eap=yes ¥
#   eaptype=EAP-TSL ¥
#   tlscIntcert=<cer file name> ¥
#   tlscIntprikey=<pfx file name> ¥
#   tlscIntprikeyPwdEnc =<password encrypted for private key> ¥
#   tlsaauthtype=user ¥
#   encryption=CCMP

#-----
#-                EAP-PEAP                    -
#-                WPA2-Enterprise GCMP (AES)  -
#-----

#IEEE8021X=yes ¥
#   Network=wireless ¥
#   Profile=<SSID> ¥
#   access=WPA2-ENT ¥
#   eap=yes ¥
#   eaptype=EAP-PEAP ¥
#   peapeap=EAP-MSCHAPV2 ¥
#   peapmschapun=<username for EAP-PEAP/EAP-MSCHAPV2> ¥
#   peapmschappwdEnc=<password encrypted for EAP-PEAP/EAP-MSCHAPV2> ¥
#   peapmschapdm=<domain for EAP-PEAP/EAP-MSCHAPV2> ¥
#   peapmschapdhidedm=yes ¥
#   encryption=CCMP

```

有線 LAN の設定例です。以下は IEEE802.1X 認証で、EAP-TLS 認証を使用する場合の例です。必要な証明書をあらかじめ US100d にインポートする必要があります。

```
#*****  
#*                Wired LAN                *  
#*****  
  
#-----  
#-                EAP-TLS                -  
#-----  
  
#IEEE8021X=yes ¥  
#    network=wired ¥  
#    access=WPA2-ENT ¥  
#    eap=yes ¥  
#    eaptype=EAP-TLS ¥  
#    tlscIntcert=<cer file name> ¥  
#    tlscIntprikey=<pfx file name> ¥  
#    tlscIntprikeyPwdEnc =<password encrypted for private key> ¥  
#    tlsaauthtype=user
```

8. トラブルシューティング

INI パラメータ使用時に問題やエラーが発生した場合には、以下のような一般的な推奨事項があります。

- スペリングと形式の誤りがないかどうかを確認してください。
- 以下の手順を実行してください。
 - a. シンクライアントを再起動します。
 - b. イベントログなどのシンクライアントシステム情報を確認します。
 - c. イベントログを検索し、無効な文があるかどうかを確認します。

リファレンスガイド
US100d INI ファイル
WTOS 8.0 Build 306

2014 年 9 月 初版

日 本 電 気 株 式 会 社
東京都港区芝五丁目 7 番 1 号
TEL (03) 3454-1111 (大代表)

©NEC Corporation 2014

日本電気株式会社の許可なく複製・改変などを行うことはできません。